

# 「不当にもダゲレオタイプと名付けられた 発明の歴史」

ダゲール剽窃弾劾パンフレット

中 崎 昌 雄

はじめに

1. Niépce 兄弟写真研究まで (1765-1813)
2. Nicéphore Niépce 写真研究 — 石版技術から
3. ヘリオグラフ法の完成
4. Daguerre との接触
5. Daguerre との共同研究契約
6. Daguerre 「銀板写真」の完成
7. 「ダゲレオタイプ」公表と Bauer の Niépce 弁護
8. 「ダゲレオタイプ教本」と Isidore 「弾劾パンフレット」出版
9. Isidore 「弾劾パンフレット」とその問題点

おわりに

付 録

1. Isidore Niépce 「ダゲール剽窃弾劾パンフレット」(翻訳)
2. Nicéphore Niépce 「ヘリオグラフ法についてのノート」(翻訳)

はじめに

私はまえに「現存する世界最古の『写真』」と題する小論を中京大学「教養論叢」に発表し<sup>(1)</sup>、Daguerre 「銀板写真」(ダゲレオタイプ)に先行する Nicéphore Niépce の写真手法「ヘリオグラフ」とその生涯について紹介しておいた。そして、そこでは Niépce と Daguerre との交渉について触れるところがあった。これらの簡単な記述にはどの写真史の本も冒頭の章を割いているが、その内容はほぼ同じである。これは当然で、ほとんど全て次ぎの3つの資料を使っているからである。

1. Victor Fouque 「La Vérite sur l'Invention de la Photographie」  
(1867)<sup>(2)</sup>
2. T. P. Kravets 「Dokumenti po Istorii Izobrenteniya Fotografii」  
(1949)<sup>(3)</sup>
3. Isidore Niépce 「Historique de la Découverte improprement  
nommée Daguerriotype」 (1841)

この中で「不当にもダゲレオタイプと名付けられた発明の歴史」は Nicéphore Niépce の遺児 Isidore が、Daguerre 「銀板写真」(ダゲレオタイプ) は父 Nicéphore 「ヘリオグラフ法」の剽窃であると訴えて印刷した 72 ページの小冊子である。刷られた数も少なく、それも友人の間などにしか配らなかったから余り知られることがない。

知られているとしても、たかだか Fouque 「真相」に引用してあるその 4 分の 1 ほどの抜粋であろう。

それで写真史家の多くは、この Fouque 「真相」の中の抜粋でその全容を想像していたと言うのが現状である。このいわば「幻の」Isidore 「ダゲール剽窃弾劾パンフレット」の全文を翻訳して紹介しようというのが私の以下の小論の目的である。ただ、どういう理由で Isidore がこんな激越な文章を公表するにいたったかについての知識がないと、このパンフレットの内容を追うのに困難を覚えるはずである。

詳細については私の「現存する世界最古の『写真』」を読んでもらうことにして、以下ではその簡単な経緯だけをまとめて提供することにしよう。

### 1. Niépce 兄弟写真研究まで (1765 - 1813)

Niépce の生涯については Fouque 「真相」に詳しい。著者 Victor Fouque (1802 年生まれ) は Niépce が生まれた Châlon 図書館の司書などをしていて、ブルゴーニュ地方の歴史に詳しく、この関係の多くの著書がある。これらは「真相」の扉にある広告から知ることができる。彼が筆をとったのは Châlon 市出身の発明家 Niépce の写真術発明における優先権を主張するためである。Daguerre 「銀板写真」を Niépce の独創的アイデアの剽窃とする立場は息子 Isidore と共通している。

これは表紙に引用してあるローマ詩人 Virgil の詩句からもわかる。

「かくて汝らはいそしめども、誉れを担えるは他の人なり。」

そして Fouque の場合には同郷人擁護というバイアスがかかっている。

Daguerre が死んでから4年目、Niépce が死んでからなら22年も経った1855（安政2年）、シャロン市会に Niépce 顕彰碑を広場に建てようという議案が提出され、市は5000フランを拠出することになった。そこで Fouque らが委員となって記念碑の完成に合わせて Niépce 伝を出版することにした。ところがこの記念碑のための募金許可が政府からなかなか下りない。Niépce を写真発明者だと認める資料がないというのが理由らしい。そこで Fouque らは記念碑の完成を待たないで Niépce 伝「真相」の方だけを1867年（慶応3年）に出版することにした<sup>(4)</sup>。

このときはまだ Isidore も存命中であったから、彼が提供してくれた手紙とか私信を利用することができた。Fouque が「真相」に利用した Nicéphore の手紙は全部で101通で、この中の66通は1816年3月21日から1817年8月16日にかけて当時パリにいた兄 Claude 宛である。これによって、われわれはかなり詳しく Nicéphore 写真研究の初期における進行状況を知ることができる。

ところが Claude がこの1817年8月ロンドンに行ってしまったからの手紙で、Fouque が利用できたのは全て兄 Claude からの返事ばかりである。これが1825年12月5日まで31通あった。

返事であるから詳しい事がわからない上に、Nicéphore の方も盗見されるのを警戒して物質名や装置の事を具体的に書かなかったから余計に分かり難い。この時分からすでに少し神経症の気味のあった Claude からの忠告でこうしたのである。

幸いこの欠落は100年も経って不完全ながら埋められることになった。1949年モスクワ科学学士院から Kravets 編「Dokumenti」が出版されたからである。この本には Niépce-Daguerre 関係のものを中心にして約170通の手紙が収録されていて、これにロシア語訳と解説が付いている。いま問題にしている期間でいえば1818年9月から1827年7月にかけてロンドン在兄 Claude 宛の Nicéphore の手紙が17通収録されている。

これらの手紙類は Isidore が Daguerre 剽窃の事実を世に知らせようと言う目的で、当時のロシア大使に送った写しを主とした物である<sup>(5)</sup>。た

だ不思議なことに Fouque が利用した 1816-1817 年にわたる Nicéphore の手紙 31 通は全く収録されていない。しかし逆に Fouque 「真相」には全然といってよいほど紹介されていない 1827 年冬ロンドン滞在中の Nicéphore の手紙とか、それ以後の Daguerre との交換書簡は数多く収録されている。これらは Daguerre がいかにして Niépce との提携に成功したかなどの経過を知る上で欠かせない資料である。

Niépce 兄弟の家はソーヌ河畔シャロン (Châlon-sur-Saône) で 300 年も続いた名家であった。兄弟の父親 Claude は法官、参議官でこの地方の徴税吏を兼ねていた。居館がシャロンにあり、それから南 8 km の Gras には荘園があった。兄弟の上には 1 人の姉 Victoire がある。兄 Claude (1763-1828) が生まれたのが 1763 年 8 月 10 日で、2 年あとの 1765 年 3 月 7 日に Nicéphore (1765-1833) が生まれた。彼等には弟 Bernard (1773-1807) がある。家が豊かであったから、兄弟はこの当時の地方としては最高の教育を受けた。Nicéphore は父の奨めで僧職志望であったが、24 歳のとき 1789 年に始ったフランス革命が一家の運命を変えてしまった。王党だった父親は Dijon に逃げ、兄弟は軍隊に志願した。

外国軍の侵攻に対抗するために 1791 年 9 月から 16-25 歳男子には徴兵令が布告されたからである。

兄 Claude は海軍に入り、Nicéphore の方は 1792 年 5 月陸軍に志願した。はじめは少尉でナポレオンのイタリア遠征などに従軍したが、当時流行していたチフスに罹って 1794 年には陸軍を退くのを余儀なくされた。司令部付副官で太尉に昇進していた。このとき Nice で看病してもらったのが縁で 1794 年 8 月、5 歳年上の Agnès Roméro (1760-1855) と結婚することになった<sup>(6)</sup>。彼女はサルジニア島出身でイタリア系である。2 人は Nice に近い Saint-Roche 村に住み、Nicéphore は Nice 地方の地方委員になったりしている。これから彼等はここで 6 年間暮すことになる。

彼等の結婚の年、1794 年 5 月 8 日には化学者 Antoine Lavoisier (1743-1794) が処刑されている。彼の不朽の名著「化学要論」(Traité) は革命の始まった 1789 年に出版されたばかりであった<sup>(7)</sup>。しかし、さすがの革命の嵐もこの年の熱月 9 日 (7 月 27 日) の反革命で Robespierre がギロチン台に登るようになると、やっと収まってきた。兄 Claude も海軍を

辞めて Saint-Roche 村に合流することになり、1795年4月5日には一人息子 Isidore (1795-1868) が生まれた。Dijon に疎開していた父親が死亡したのがこの年である。1797年から1798年にかけて兄弟で Agnès の実家のあるサルジニア島 Cagliari に滞在したらしい。30年近くもあとの1824年9月16日当時ロンドンにいた兄 Claude に宛てた手紙によると、写真の着想はこのときに生まれたことになっている<sup>(8)</sup>。

この写真とは別に船舶用の内燃機関の研究を始めたのもこのころである。「オールと帆の助けを借りないで」船を走らせようと言うのである。彼等はこの機関を「ピレオロホール」(pyréolophore) と名付けた。

1798年ナポレオンのエジプト遠征は失敗に終わったが、1800年2度目のイタリア遠征では5月雪の St-Bernard 峠を越えて北イタリアに展開し、Marengo 会戦で大勝利を収めた。1801年2月オーストリアとの和議が成立し、ヨーロッパにも一応の平和がもどって来た。

Niépcé 兄弟が9年ぶりで母と弟の待つシャロンに帰ることができたのが1801年6月である。彼等はこれから Gras の荘園を経営し、以前ほどではないがかなりの資産と土地を回復することができた。この資金を使って「ピレオロホール」の開発に力を注ぐことになるのだが、結局はこの事業が命取りとなり資産を蕩尽する運命となる。

1806年11月には特許を申請し、10年間の特許が1807年4月に許可された。彼等は実際にモデル船を作ってソーヌ河で実験したらしい。Fouque が「真相」を書き始めた1860年ころには、Niépcé 兄弟のこのときの実験のことを覚えている人がいたそうである。

兄弟が科学学士院に提出した報告は C. L. Berthollet (1748-1822), Lazare Carnot (1753-1823) らの委員によって審査され、1806年12月15日に学士院で発表された。Berthollet は Lavoisier の後継者として著名な化学者である。ナポレオンのエジプト遠征にも科学顧問として従軍した。一方 Carnot の方は軍事技術者として有名でメートル法制定、砲工学校 (École polytechnique) の創設 (1794) に貢献した。熱力学「Carnot サイクル」の Carnot は彼の長男 Sadi Carnot (1796-1832) である。

さて委員会の報告によると「ピレオロホール」は花火に使う石松子 (リポコジウム) を燃料とする内燃機関で、これを載せた船はソーヌ河を遡る

ことができたと言う。燃料は石松子とは別に石炭粉末を樹脂で固めた物でもよく、エンジンの回転数は1分間に12-13回であった。

このころセーヌ河の水をベルサイユ宮殿に運ぶ水揚ポンプ設計の募集もあったらしい。Niépce 兄弟はこれにも応募して、彼等が「pompe hydrostatique」と名付けたポンプを提出した。これに対して Carnot が批評の手紙を書いた。この1807年12月31日付の手紙は Isidore「ダゲール弾効パンフレット」に収録されている。この手紙の中には兄弟のポンプと Joseph Montgolfier (1740-1810) の水力ポンプ (1796) の比較があって面白い。この Joseph はフランス革命の6年前、1783年にベルサイユ宮殿で熱気球をとばした Montgolfier 兄弟の兄の方である<sup>(9)</sup>。

フランスでは1807年ころから物質が不足して来た。1806年11月ナポレオンが出した勅令「大陸封鎖令」はイギリスを経済封鎖する目的であったが、逆にイギリスからの輸入品も入って来なくなったのである。

器用な Niépce 兄弟は「ピレオロホール」開発と並行して、いろんな代用品の製造にも手を出す。たとえば砂糖の材料としての甜菜の栽培とか、カボチャからの澱粉の製造などである。

中でも兄弟が力をいれたのは染料の藍（インジゴ）の生産である。大陸封鎖の結果、イギリス経由のインド産インジゴが入って来なくなったので、これを「大青」（たいせい）から抽出することにした。この植物は古くからヨーロッパではインジゴの原料として栽培されていたが、インド産の物に押されて栽培されないようになっていたのである。彼等の努力にもかかわらず、これらの代用品の事業は、いずれも企業化されることはなかった。しかし Isidore「ダゲール弾効パンフレット」には大青研究に対する1811年内務大臣からの感謝状が2通収録されている。

## 2. Nicéphore Niépce 写真研究 — 石版技術から

1813年10月 Leipzig 会戦で敗れたナポレオンは退位して、次ぎの年の5月 Elba 島に流された。しかし1815年2月には島を脱出、あと百日天下、6月の Waterloo 会戦と続く。この戦にも敗れたナポレオンが St-Helena 島の流刑地に到着したのが10月15日である。これでやっとヨーロッパにも平和がもどって来た。

このころからパリで石版(リトグラフ, lithographie)が流行し始めた。これは15年も前にミュンヘンの A. Senefelder (1771-1834)<sup>(10)</sup> が発明した物で、戦争の収まった今ごろになってやっとパリに入ってきたのである。これが爆発的流行をみた。

この技法のあらましは次ぎのとおりである<sup>(11)</sup>。

まずババリア産 Solnhofen 石を磨いて、その表面に油性インキで字や絵を描く。ついで少しの酸を含んだ水で湿めらせると、生地の石のところは水を含むが、油性インキで書いた部分は水を弾く。この表面にローラーで印刷インキを伸ばすと、油性インキで描いたところにだけインキが集まる。水を含んだ生地の石のところは印刷インキを反発するからである。この上にプレスで紙を押しつけて印刷インキを紙に移す。これで印刷プリントができる。いわゆる「平版」である<sup>(12)</sup>。

Nicéphore は1813年ころから、この石版石をフランスに多い大理石で代用させることを考えた。たまたまシャロン-リヨン国道の補修に使用されていた大理石の切石から思い付いたのであろう。石版石の代用品の研究は写真研究と並行して1年ほど続く。ただ道路用の大理石では生地が粗くてうまく行かなかったから、このころ楽譜印刷に使っていたピューター板(planche d'etan poli)を利用することにした。これは錫4、鉛1の合金である。始めは息子の Isidore が絵を描いてくれていたが、彼が1814年6月から軍隊にとられてしまった。それで絵を描く代わりに版画を焼き付ける事を考え始めたと言う。

この1813年から1816年夏までの研究については、Fouque「真相」執筆のときに、その材料として Isidore が1867年2月26日付で書いてくれた手紙から少し分かる程度である。ピューター板にいろんなニスを塗り、この上に版画を重ねて自分の仕事部屋の窓のところで、太陽光線に当てて焼き付けをした。そのあと腐刻を試みたらしい。

1816年3月になると兄 Claude がパリに移住した。首都での方が「ピレオロホール」開発事業が有利に運ぶと考えたのである。兄はもう53歳になっていたし、Nicéphore の方も51歳である。パリには次ぎの年、1817年8月ロンドンに移るまで約1年半いた。この間に Nicéphore が兄に書いた手紙66通の中で、30通ほどが Fouque「真相」の中に紹介されてい

る。これから、われわれはかなり確実に写真研究の初期段階における、Nicéphore の使った装置とか研究の進捗状況を知ることができる。

この 1813 年から Daguerre との共同研究契約が成立する 1829 年 12 月までの研究経過をまとめたのが「表 1」である。

表 1. Niépce ヘリオグラフ「写真」完成まで

1813-15	石版研究。銅版原画を大理石、ピューター板（錫 4，鉛 1 合金）に「密着焼き付け」光複写をする。
1816	塩化銀感光紙を作り，カメラで「自然の写真」を撮る。硝酸で不完全ながら定着，紙陰画を作る（作品は残らず）。石，金属の腐刻。3 月兄 Claude「ピレオロホール」企業化のためにパリに移住。
1817	塩化銀を諦め，石，紙のうえに塩化鉄，グアヤク樹脂，リンなどの感光剤を試みる。8 月兄 Claude ロンドンに向かう。
1818-19	実験継続中，詳細は不明。
1820	感光剤にアスファルト (bitume de Judée) を利用する。ヘリオグラフ法の始め（作品は残らず）。
1822	ヘリオグラフ法により，ガラス板の上に銅版原画からの「密着焼き付け」に成功（作品は残らず）。Poncet 将軍パリで飾り枠を作らせる。
1824	ヘリオグラフ法により，石板，ガラス板，銅板の上にカメラで「自然を撮る」ことに成功。「写真の始め」（作品は残らず）。
1825	ヘリオグラフ法により金属板の上に版画「密着焼き付け」，ついで腐刻して蝕板を作るのに成功。ただしプリントはできず。
1826	「密着焼き付け」ピューター板を蝕板にしてプリントに成功（蝕板，プリントともに残っている）。1 月 Niépce 大佐がパリでこの作品を見せる。1 月末 Daguerre が手紙をよこす。ピューター板上にカメラによりヘリオグラフ法で「自然」を撮る。
1827	1 月版画家 Lemaitre に作品を送り腐刻を依頼する。 6 月 Daguerre に蝕板とプリントを送る。 6-7 月ピューター板に「自然を撮る」ことに成功（原版は 1952 年にロンドンで発見された）。これから蝕板を作るのには失敗。 8 月 Daguerre と合う。9 月兄の看病にロンドンに向かう。



1828	2月ロンドンより帰る。兄 Claude の死。パリで Daguerre に共同研究の提案。銀メッキ銅板を利用し始める。1825年ころから Chevalier 店にレンズ注文, このころ特に多い。
1829	銀メッキ銅板ヘリオグラフのコントラストを強めるのに, この上にヨウ素蒸気を作用させる。レンズとカメラの改良に苦心する。12月14日 Daguerre との10年間の共同研究契約に署名する。

カメラ (camera obscura, 暗箱写生器) を使うのは Claude がパリに出发してすぐに始めたらしい。1816年4月12日付の手紙には「一種の人工眼を作りました」とある。6インチ角の木箱にレンズを取り付けた物である。5月19日の手紙になると「2枚の印画 (gravure) を送ります」とあって, これらは硝酸によって光に当てても変わらないようにしてあるが「それでも次第に消えて行くのではないか」と心配している。風景は Gras 居館2階の仕事部屋から南に向って中庭を撮った物である。

この手紙には感光剤に何を使ったか書いてはない。1年あとの1817年4月20日付手紙に「塩化銀 (muriate d'argent) を諦めた」とあるところから, これが紙に塩化銀を塗った物と分かる。

この方面の先駆者はイギリスの Thomas Wedgwood (1771-1805) である<sup>(13)</sup>。彼は王立研究所に着任したばかりの Humphry Davy (1778-1829) の協力を得て「王立研究所紀要」(Journal of the Royal Institution) 第1巻(1802)にカメラの映像を固定する試みを報告していた。

Wedgwood が使った感光材は紙や皮に硝酸銀水溶液を塗った物で, この上に字などを描いたガラス板を載せて太陽光を当てた。塩化銀はさらに敏感であるが硝酸銀より使いにくいと報告している。太陽顕微鏡の映像は撮ることができたが, カメラでの映像を撮るのには成功しなかった。しかし彼等はいずれの場合でも, まだ「定着」には成功していない。だから画像はロウソクの灯で見なければならぬ。もっとも Wedgwood は「定着」(fix) という言葉は使っていない。彼等の報告は次ぎの言葉で終わっている。

「欠けているものと言え, 絵の未露光の部分が日光に当てて黒化しないようにする方法の発見だけである。」

この「王立研究所紀要」はすぐに一時廃刊となったし, イギリスの出版物

でもあるから、フランスの片田舎シャロンにいる Niépce 兄弟がこの発表を知らずに、独立に仕事を始めたのは確実である。しかも Niépce の方はカメラで映像を撮るのに一応の成功を見たのであるから Wedgwood より進歩している。それでも Wedgwood-Davy を悩ました定着には成功していなかった。例の 1816 年 5 月 19 日付手紙のあとの方にはこうある。

「私はこれから 3 つの事をしようと思っています。第 1. 対象物をシャープに写すこと。第 2. 色を逆転させること (transposer les couleurs)。最後にそれを定着 (fixer) すること。」

このように Nicéphore は「fixer」という言葉を使って現在の「定着」を表現している。第 2 「色を逆転させること」は白黒反対の陰画を陽画に変える操作である。結局 Niépce はこの第 2, 第 3 の試みに全て失敗して、やがて塩化銀を諦めてしまう。

この方面で成功するのがイギリスの Talbot (1800-1877) であるが、これにはもう 19 年も待たねばならない<sup>(14)</sup>。

Niépce はまた石や金属の上にカメラ映像を腐刻することも考えている。感光剤にしても「表 1」に見るように塩化鉄、グアヤク樹脂、リンなどを試みているがいずれも失敗した。

### 3. ヘリオグラフ法の完成

写真の方ではこれ以上に余り進展を見ないままに 1 年半が経ち、1817 年 8 月から Claude がロンドンに移った。イギリスの方が自分たちの発明を認めてくれると考えたのである。Claude はこれから 10 年もイギリスに滞在し、フランスに帰ることなくこの地で客死することになる。

これから 1827 年春まで間の 10 年間、Nicéphore がロンドン在住の兄 Claude に出した手紙で残っている物は数少ない。Fouque「真相」の中には 1 通も収録されていない。Fouque が利用できたのは Claude が寄こした返事の 31 通であり、この中の 20 通ほどの抜粋だけが「真相」の中に紹介されている。Nicéphore が自分の写真研究を知らせたのに対する返事だけであるから詳しい事は分からない。Claude が盗見を恐れて余り詳しく書くなと忠告しているから余計である。

1818 年 10 月 29 日付手紙には次のようにある。

「君の仕事の詳細をお知らせ願える喜びにも係わらず、私は君が余りにもあけむらに書くので、手紙が読まれこの発見の原理が盗まれはしないかと心配です。」「君からお知らせ願う興味のある詳細を読むのは大変に楽しいのですが、ある種のことを詳しく書くのは止めたらいかがですか。」「とくに配る人の目に触れる手紙の最後のページには書かないでください。」

こんな訳で「表1」に見るように1818-1819年の仕事についてはほとんど分からない。2年ほどして1820年春ころからエッチング銅版画に使うアスファルトの光による硬化を利用する研究を始めた。

「ヘリオグラフィ法」の始めである。

1820年3月17日付の手紙で Claude は次ぎのように返事している。

「君の知らせてくれた興味ある詳細を、読みかえし読みかえしして、味わっている喜びを察してくれ。君の素晴らしい希望が実現される日を、どんなに待ち望んでいることだろう。(d'h...oui) の助けで、黒いニスを光線に感じさせようとしている、君の試みはよく覚えているが、印象を消えないように残しておくのだったね。それができれば、問題は決定的に解かれるのだが。」

この読めないところはフランス写真史家 Potonniée によると「l'huile de Dippel」ではないかと言う<sup>(15)</sup>。「Dippel 油」は骨を乾溜して作る医薬品で、その感光性は古くから知られていた。Isidore の回想によると始めはこの動物油を利用したらしい<sup>(16)</sup>。「黒いニス」(verniss obscur) は「ユダヤ・アスファルト」(bitume de Judée) である。このアスファルトは中東地方からの輸入品で、古くからエッチング銅版画における腐刻のときの「レジスト」として広く使用されていた。Niépce はあとでは、この Dippel 油に代えてラベンダ油を使用するようになった。

さて「ヘリオグラフィ法」の手法であるが、その詳細は Niépce が書いた「ヘリオグラフィ法についてのノート」の中に詳しく説明されているのでわかる<sup>(17)</sup>。この「ノート」は1829年12月に Daguerre との間に交わされた共同研究契約第3条に従って Daguerre に書いて与えた物である。

まずアスファルトをラベンダ油に溶かして、これを金属板の上に薄く塗る。乾いてからこの上に、油で透明にした銅版画原画を重ねて直射日光に

当てる。この「密着焼き付け」の時間は 2-3 時間である。光の当たったところが硬くなり、描線の下などで光が当らなかった部分は柔らかいまま残る。この柔らかいところをラベンダ油と石油の混合物の中に浸して溶かし去る。あと水洗して乾燥すると操作は終わる。こうして光の当たったところにだけ、灰白色のアスファルトが残ることとなる。斜めにしてみると、ここだけが白く見えるから陽画である。これからプリント用蝕板を作るには、硝酸浴の中で浸けて腐蝕する。描線の下在所だけが腐刻されるから「凹版」ができる。プレスでプリントを刷るところは、エッチング銅版画と同じである。方法の成功を知らせたらしい Nicéphore の手紙に対して 1822 年 7 月 19 日付で兄 Claude が返事をした。

「新しい発見の知らせに満足しています。Poncet 将軍も同じように、君の発見の見事さに夢中になったに違いありません。親切にも送って戴いた興味ある詳細を、感心しながら読みかえし読みかえししています。懐かしい義妹や甥が君と同じように、真剣にこの光線のなしとげた驚くべき仕事を、見ている様子が目に見えるようです。かって喜んでみた覚えのある風景 (point de vue) を、自分で見る思いがします。このように素晴らしく、君にとっても、また科学にとっても興味深い実験が成功し、確実になる事を願わずにはられません。」

彼等の手紙の中に風景 (point de vue) という言葉が出てくるのはこれが最初である。Potonniée はこの風景を Gras 荘園中庭をカメラで撮った物と見て、1822 年を「カメラによる自然撮影成功の最初」とする<sup>(18)</sup>。しかし、このとき親類の Poncet du Maupas 将軍が見て感心したのは、ガラス板上にヘリオグラフ法で焼き付けた法王ピウス (Pius) 7 世の銅版画らしい。将軍はこの 1822 年夏に Gras で Nicéphore からこれを譲り受け、パリ Alphonse Giroux 商会に金メッキ枠を作らせた。この金属枠で留めたガラス板で保護して、裏表から見えるようにしたのである。しかし駅馬車で旅行中、友人がこれを落して壊わしてしまった。Fouque によると Isidore はこの挿話を告げるときに、残された金属枠を Fouque に手渡して見せたそうである<sup>(19)</sup>。

「自然の風景をカメラ」で撮るのに確実に成功したのがわかるのは、珍しく残っていた 1824 年 9 月 16 日 Nicéphore が兄 Claude に宛てた手紙の

中であろう。

「私の改良法によると、思いのままに風景 (point de vue) が撮れるので満足しております。いままで不完全な物しか得ておりませんので、自慢できませんが。景色は Gras に向いたあなたの部屋から撮りました。それには一番大きな暗箱写生器と、一番大きな石を使いました。対象物の画像 (image) は細かい点までシャープで、驚くほど忠実に撮れました。しかも、大変にデリケートな諸調までです。この画像はほとんど色が付いておりませんから、石を斜めにして見て始めて見えるようになります。これは影と光線の反射で始めて見えるようになるからなのですが、この画像たるや正に魔法 (magique) のようです。」

ここでは石板の上に撮っている。手紙のあとの方にはこれを酸で腐蝕して蝕板にするところが書いてある。これが次ぎの年、1825年になると金属板の上に版画を密着焼き付けてから、腐刻して蝕板を作りこれからプリントを刷るのに確実に成功することになる。そしてこの時分から新しく手に入れたピューター板を使用するようになった。これはアルプスに新婚旅行に行っていた Isidore に 1826年5月26日付で宛た手紙からわかる。

「ロンドンからは、まだ手紙がありません。私のヘリオグラフの仕事は大変に活発です。私は新しいピューター板 (planches d'etain) を入手しました。この金属は私の目的にずっと良ろしい。とくに光線の反射が良いので、自然の風景 (les points de vue d'après nature) を撮るのに好都合です。私はこの好都合なインスピレーションを喜んでいます。」

Isidore は7年間いた軍隊を1821年に退いて<sup>(20)</sup>、前年1825年に結婚していたのである。

#### 4. Daguerre との接触

予想に反してあまりはかばかしく進歩しないままに、研究を始めてから約13年も経って1826年になった。このころになって始めて Nicéphore は自分の隠れた競争相手 Daguerre の存在に気が付いた。

Nicéphore にも写真研究ばかりしておれない事情がある。兄への仕送りが大変である。兄がシャロンを離れてから10年になる。この兄に年間約20,000フラン送らねばならない。Nicéphore 家の年間経費は1809年ごろ

で 2,500 フラン程度であるから桁が違う。このための借金に走り廻らねばならない。

1826 年明けて早そう親類の名物男 Niépce 大佐がパリに行く用事があると言うので、Nicéphore はパリで有名な光学器械商 Chevalier 店によってカメラを購って来てくれるように頼んだ。この Niépce 大佐は祖父のときに分かれた分家である<sup>(21)</sup>。Chevalier 店には 2 年も前からいろんな物を注文していた。Chevalier 店での出来事については、Niépce 大佐が訪ねたときに店にいた Charles Chevalier や Charles の息子 Arthur が父について書いた物の中にある<sup>(22)(23)</sup>。Fouque 「真相」が出版された 1867 年、Niépce 大佐は 86 歳でまだ元気だったそうである。Fouque が大佐から聞いた話は Arthur の告げるのと小さなところでは違いますが大差はないと言う。Chevalier 店で大佐はピューター板の上に「糸を紡ぐ少女」銅版画を焼き付けた蝕板を見せたらしい。1826 年 1 月 12 日のことである。

もっとも 1825 年 11 月 8 日付けで Niépce に宛た Vincent Chevalier の手紙によると、彼らが 1825 年暮れには Niépce の仕事について知っていた事が分かる。<sup>(54)</sup>

これが Daguerre の耳に入って、Daguerre はすぐに Niépce に手紙を書いた。この手紙は Isidore が父に聞いたところによると「高びしゃで乱暴な」物だったらしい。残念ながらこの手紙は残っていない。

次の年、1827 年 9 月 Nicéphore がパリ滞在中にホテルの便所に財布と一緒に落としてしまったのである。Isidore 「ダゲール弾劾パンフレット」によると次の 1 節があったと言う。

「私は長い間、不可能な事を研究しています。」

Nicéphore は 1 月 25 日付で当たり障りのない返事をしておいた。

これに対する Daguerre の返事は 1 年も経ってから、次の年の 1827 年 2 月 2 日に届く。

Daguerre (Louis Jacques Mandé, 1787-1851) は 4 年前の 1822 年に開場したジオラマ館の経営者でパリではよく知られた企業家兼画家であった<sup>(24)</sup>。ジオラマ (diorama) は静的なパノラマに照明で変化を付けた見世物で、画面は 14 × 21 m という大きな幕の裏表に描いてあった。幕のどの面に天窓からと横からの照明を当てるかによって場面を変化させる。

Daguerre が写真を研究するようになったのは1824年ころかららしい。ジオラマ原画を本物らしく見せるために風景を暗箱写生器を利用して写生した。この写生器のスクリーンにレンズが投射する映像を鉛筆で辿って写生する代わりに、何か化学変化を利用して固定できない物かというアイデアである。

Daguerre は元もと画家志望で舞台装置で名を知られていた位であるから器用な男である。だが Niépce 兄弟と違って正規の教育を受けていないから化学には全くの素人である。それで模索を続けていたが、全くと言ってよいほど成績を挙げていなかった。

その彼が行きつけの Chevalier 店に寄って見ると、シャロンで同じ写真研究をしている人がいて、しかも成功していると言う話である。早速に連絡したところ、Nicéphore からはかばかしい返事が来なかった。彼は鍵をかけて誰も入れないようにした部屋に閉じこもって研究を始めた。

この1826年 Nicéphore の方はヘリオグラフ法で作ったエッチング板からプリントを刷るのに成功している。このころの作品はかなり多く残っている。中でも有名なのは d'Amboise 僧正の肖像版画から直接焼き付けで作った蝕板と、それから刷ったプリントであろう。これは大ていの写真史の本に載っている<sup>(25)</sup>。だが風景を撮った物の腐刻はそう簡単ではない。それでパリで名の知れた版画家 A. F. Lemaître (1797-1870) に助力を求めた。Niépce は自分で浅く腐刻したサンプルを送って腐刻を頼んだりしている。このころの Niépce-Lemaître の書簡は数多く残っている。一方このころの Niépce-Daguerre 交換書簡の方は上で述べたような理由で残っていないから、この間の交渉は Niépce-Lemaître 書簡から知るだけである。この手紙から判断すると Niépce が9月にパリ上京するまで数回手紙の遣り取りがあったらしい。その中で Niépce が出した2月3日、6月4日付の手紙が残っていて、この2通が Isidore「パンフレット」の中に収録されている。

2月3日の方はに2月とだけしか日付がない。これが2月3日であるのは2月2日に Lemaître に出した手紙からわかる。手紙の中に今日になって、先年1826年1月25日に Daguerre に書いた手紙の返事が届いたとある。Daguerre に返事をしたのが次ぎの日である。Isidore が「パンフレッ

ト」で公表したこれらの手紙を読むと、Daguerre がかなりのハッタリをかましてしている様子が分かる。2月3日の手紙で Nicéphore は次のように言っている。

「私は金属板の腐刻にかなりの改良を加えました。しかし結果はそれほどではありませんので、お望みのようにはして上げられません。これは私も残念とする所ですが、あなたの方法は私のと全く違い、私の腐刻法よりずっと優れた結果を与えそうです。」

Nicéphore の方はカメラで自然の風景を撮るのに露出が8時間近くもかかること、またその腐刻が困難なのに手を焼いていた。

Daguerre は興業師で駆け引きは心得ている。「カメラの事なら自分に委せろ」位は言ったのであろう。Nicéphore の方も警戒しながらもそれに乗り、次第に協力する気になって、6月4日にはピューター蝕板とプリントのサンプルを送るまでになった。この手紙も「弾劾パンフレット」の中に収録されている。手紙のあとの方に次のようにある。

「おなじ目的に従事していて、ゴールに到達するように仕事を教え合うのは、おたがいのためになります。ですから、私はあなたの改良型暗箱写生器による実験が、お望みの結果を与えたとお知らせ願えるのを楽しみにしております。」

Daguerre はカメラの改良を餌にしているのである。Isidore は「パンフレット」の中で、このハッタリを詐欺だと糾弾する。

## 5. Daguerre との共同研究契約

この1827年6月は天気の良い日が多かったらしい。それで Nicéphore は Gras 荘園の2階仕事部屋から中庭の写真をピューター板上に数枚撮ることができた。この中の1枚が「世界最古の写真」となる運命にある。8月になると Nicéphore 夫妻は Isidore 夫妻を留守番にして上京することになった。10年前にロンドンに行った切りの兄 Claude の具合がおかしいという知らせがあったからである。旅券や駅馬車の予約などで足止めを喰ってパリでは数日滞在するはめになった。Nicéphore は始めて版画家 Lemaitre や Daguerre と会った。Daguerre とは数回会ってジオラマ館を案内してもらったり、彼の実験を見せてもらったりした。その時の様子



を詳しく Isidore に知らせた手紙 (9月2-4日付) が残っている。

ジオラマ館には感心したが、Daguerre の写真研究には感心した様子はない。燐光物質に光を当てて4色を固定すると言う触れ込みであったが、実用性のない手品のような物で、Nicéphore はこれを「逃げて行く影」(nuances fugitives) と批評している。

Daguerre には見せる物が何もなかったと言うのが本当だろう。

Nicéphore の方は兄に見せたりイギリスでその企業化の可能性をさぐる目的で、ヘリオグラフ法で作った蝕板、それから刷ったプリント、それに「自然を撮った写真」のサンプルを持って来ていたのだが、Daguerre には見せなかった。Lemaitre から共同研究には慎重でかかれという忠告もあったからである。

ロンドンに着いて Claude を訪ねると、彼は気が狂っていた。それも5-6年も前からだと言う。兄はロンドン西郊にある王立 Kew 植物園の近くに住んでいた。手紙には永久機関に成功したよう書いていたが、全て狂った頭からの幻想だったのである。1827年11月5日 Kew から郷里の Isidore に当てた悲痛な手紙には心を打たれる。「私たちもそうするが、Isidore お前も悲惨な詳細に心を痛めないでほしい。」

この手紙のあとの方には国王 George 4 世への働きかけのことが書いてある。また泊った Cussel 「Coach and Horses Inn」は食事が悪く、しかも2人で週100フランもするとこぼしている。傷心の Nicéphore 夫妻はここに5ヵ月近くも滞在することになる。滞在中、近所に住んでいた王立学会会員 (fellow) 植物学者 Francis Bauer (1758-1840) が親切にしてくれた。写真作品を見せられて感心したのであろう。この人の忠告で王立学会に報告してみるのが本筋だろうと言うことになり、Nicéphore は Bauer に見本としてヘリオグラフ蝕板4枚に添えて発明の概要を書いたメモを手渡した。

このメモ「Notice sur l'héliographie」はフランス語で4枚に書かれ、最後に「Kew, 1827年12月8日」署名、住所がある。しかしこれらの王立学会に対する働きかけは全て実を結ばなかった。「Notice」は全文が Fouque 「真相」に収録されている<sup>(26)</sup>。この全訳が「付録2」である。これを読むとこんな漠然とした説明では、学術報告として受け取ってもらえな

くて当然だと言う印象を受ける。Nicéphore があとで Bauer に書いた手紙で言っているように、企業化が目的であるから手法の秘密 (secret) には全く触れていないのである。イギリスで接触したのはこの他に、王立学会の総務 Thomas Young とか副会長の 1 人 Wollaston 博士などがあったが、彼の秘密主義が災いしていずれも物にならなかった。

次の年、1828 年 2 月の始めに Nicéphore 夫妻は病身の兄 Claude をあとに残してロンドンを発った。別れるときに親切にしてくれた Bauer にヘリオグラフ作品や自筆の「Notice」などを贈った。兄 Claude は彼等が発つとすぐに死亡した。1828 年 2 月 10 日、65 歳であった。

Nicéphore の方も 63 歳、妻 Agnès は 68 歳になっている。

帰りにはパリに寄って 2 週間ほど滞在した。もちろんこの間に数回 Daguerre に会っている。如才のない Daguerre の事だから気落ちのした夫妻を上手に慰めたに相違ない。パリに着いたことを Isidore に知らせる 1828 年 2 月 22 日付手紙には、Chevalier 店でヘリオスコピック対物レンズを注文したと告げている。Daguerre に吹き込まれたのであろう、このころから Nicéphore は写真の行き詰まりを解決するには、レンズの改良以外に手はないと考えるようになった。なにしろ 8 時間もの露出では実用にほど遠い。パリに住んで Chevalier 店を抱き込んでいる Daguerre はこの方面から攻めて Nicéphore に共同研究を迫る。これにはかなりのハッターを要する。共同研究契約の 2 ヶ月ほど前の 11 月 15 日付手紙では「この改良は今までの暗箱写生器のどれと比較しても 3 倍の力を発揮します」などと言っている。

Nicéphore の Chevalier 店への注文も 1828 年ころから多くなる<sup>(27)</sup>。

パリから帰ったころから Nicéphore はピューター板の代わりに銀メッキ銅板を使いはじめた。前から Lemaitre に蝕板には軟かいピューター板より銅板が良いと言われていた。しかし銅板では表面からの反射が少くてアスファルトの硬化が遅い。それで銀メッキ銅板にしたのである。これだと表面が白くて反射もよくピューター板よりも硬い。

次の年、1829 年になるとヘリオグラフ写真のコントラストを強調する目的で表面にヨウ素蒸気を作用させることを考えた。こうすると地の銀のところはヨウ化銀となって黒くなり、明暗がはっきりするからである。

Nicéphore は少くともこの時からヨウ化銀の感光性に気が付いて実験をしている。共同研究を始めてからのことであるが、Daguerre が1831年5月10日の手紙でヨウ素のことを告げたのに対して、次ぎのように返事をしているのからこれ分かる。6月24日付手紙である。

「私はあなたと交渉をもつ前から、すでにこの同じ仕事をしていました。」

Nicéphore はヨウ化銀には最後まで興味を示さなかったが、Daguerre はこのアイデアに固執して7年間も粘り、とうとう「ダゲレオタイプ」を完成したのだから彼は彼なりに大した物である。

彼等の中に10年間の共同研究契約が結ばれたのが1829年12月14日である。Daguerre が Chevalier に住所を聞いて手紙を出してから丸4年も経っている。Daguerre は駅馬車でやって来て、数日間滞在してヘリオグラフィ法の実験を学んで帰った。Isidore 「パンフレット」によると Daguerre はこのときも燐光物質を自慢げに Isidore に見せたと言う。このときに交わした「予備契約の基本」は「パンフレット」に収録されている。

だから1841年になって始めて世間の人はその存在と内容を知ったのである。契約第3条にはヘリオグラフィ法を文書にして渡すこととあり、Daguerre はこの文書をもらった。この「Notice sur l'Héliographie」には1829年11月24日と署名がある。さらに「追加」が付いてこれには12月5日と署名されている。この操作法は長いためか Isidore 「パンフレット」には収録されていないが、Fouque 「真相」と Daguerre 「ダゲレオタイプ教本」には収録されているから見る事ができる。

技術家肌の Nicéphore が書いただけあって記述は行き届いている。

この全文の翻訳は私の「Talbot『写真印刷』発明と晩年の研究」中京大学「教養論叢」第31巻、第4号(通巻93号)に付録としてある<sup>(28)</sup>。

Daguerre が自分の「ダゲレオタイプ教本」(1839)にこの「Notice」を載せたのは契約に沿った行為であったが、Daguerre はこれにわざわざ序文をつけて次ぎのように言う<sup>(29)</sup>。

「Niépce 氏は1814年から暗箱写生器の映像を固定する (fixer) 研究をしていたが、とくに感光性の物質の上に版画を複写 (copie de gravures) するのに力を入れていた。Daguerre 氏も同じように、1824年から

暗箱写生器の映像を固定するのを唯一の目的にして光の研究を始めた。それは版画の複写をこの方法で行っても、芸術にあまり役に立たないと判断したからである。」

下線のところはイタリックで強調してある個所である。このようにここでも自分の「写真」を宣伝している。その上に自分の本に収録した「Notice」には 10 数個所にわたって長い「注」をつけた。これは「注」とは言うものの、この中でいかにヘリオグラフ法が不完全な物であることを示し、自分の銀板写真がヘリオグラフ法の単なる延長でない事を強調する。

たとえ真実であっても、親思いの Isidore が激怒して当然である。

Isidore が「パンフレット」の中で何度も指摘している Daguerre の過剰な自己顕示慾 (amour-propre désordonné) の仕業である。

## 6. Daguerre 「銀板写真」の完成

契約成立のとき Nicéphore は 64 歳で Daguerre は 42 歳であった。

このあと 2 人は会うことがない。共同研究は 4 年ほど続く。

手紙で連絡し合うのだが、これには用心深く暗号を使っている。例えば 1831 年 5 月 21 日例のヨウ化銀の感光性を告げる手紙の中で Daguerre は次のように書く<sup>(30)</sup>。

「多くの新しい実験をした結果、私はヨウ素 (20) の研究に集中しなければならぬと考えます。この物質は銀板 (18) と接触すると、光 (46) に対して大いに感受性 (sensibilité) を発揮します。しかし、これには越えてはいけない限度があって、これが美しい均一の金色になったら直ぐに取り出さねばなりません。」

ここでヨウ素 (20) と書いておいたが、本当の手紙では (20) だけなのである。Daguerre はいろいろ口は出すが実際の実験は Nicéphore がしている。あまり進展を見ないままに 4 年が過ぎ 1833 年 7 月 5 日 Nicéphore が脳卒中で死亡してしまっただけでなく、69 歳にもなっていた。本格的に写真研究を始めたのが 1816 年としても 17 年続いたことになる。残された Isidore は借金のために Gras 荘園を手離して母と家族を連れて Lux 村に移った。彼も 35 歳になっている。Isidore が結婚のときに父親から譲られたシャロンの家はすでに 1830 年に売り払っていた。

共同研究は予備契約第2条によって Isidore が引き継いだ、才能もなく軍隊に取られたりして十分な教育を受けなかった彼に科学実験を期待する方が無理である。しかし Daguerre は Isidore を叱っている。1834年12月27日の手紙で次のように言う<sup>(31)</sup>。

「利益になる事は何もしないで、時を過ごしている人のように、のんびりしているとは残念です。私にはそんな事はできません。私は朝の6時から夜の6時まで、例の絵を描いています。ところが君ときたら、何もしていないようではありませんか。私は叱らねばなりません。私たちが公表するまでに、多くの作品を完成させなければならないのを、君も知っているでしょう。」

いずれにしても、これから Daguerre が独力で仕事をしなければならない。そして1835年になって、やっと「銀板写真」の骨子である「水銀現像法」を完成した。磨いた銀板の表面にヨウ素蒸気をあてて、表面に金色のヨウ化銀膜を作る。これが感光材である。これをカメラに入れて露光する。露出は強い陽光のもとで数分である。光の当たったところのヨウ化銀は銀粒子に変わるが、これはまだ目に見えない。銀板を取り出して水銀蒸気に触れさせると、銀粒子が水銀に溶けて合金（アマルガム）ができる。斜めから見るとこれが光を反射して白く見える。このように始めに光が当たったところが白く見えるから「直接陽画」である。

この1835年春に Daguerre は Isidore をパリに呼んで予備契約に新しい補足を加えるのに同意させた。署名は1835年5月9日となっている。この「追加契約」も Isidore 「パンフレット」に収録されている。前の契約のときは商標が「Niépce-Daguerre」だったのを今度は「Daguerre-Isidore Nicépce」に変えるのがその主旨である。その署名のときの様子が Isidore 「パンフレット」には次のようにある。

「震える手で署名しながら、しかし私は父の権利を侵害する、このような行為に抗議したのである。」

Daguerre はまだこの時には定着法を完成していない。だからこの時には Isidore に試作品を見せなかった。それが1837年になると一応の定着法を完成した。濃い食塩水で洗うのである。そこで1837年6月にもう一度 Isidore をパリ「ジオラマ館」の自宅に呼びよせて、「最終契約」に署名さ

せた。署名は1837年6月13日になっている。このときは商標を「Daguerre」だけにするというのが主な変更で、あとに予約制にしてこの発明を売るという条項がある。Isidore は「力と暴力で獲得した商標に何の価値があるのか」と抗議したが無駄であった。このときは Daguerre も試作品を見せた。これも見せられては Isidore も沈黙せざるを得ない。

「これは、あとでこれを見た全ての人びとと同じように、私を驚嘆させたのである。」

しかも当時の Isidore は金に困っていた。おまけに彼自身は何の貢献もしていない。独力で父のヘリオグラフ法を「銀板写真」の完成度にまで仕上げ能力も自信もない。Daguerre には美しく仕上げた銀板写真の完成品を見せつけられる。それに折半とはいえ金は手に届くところに来ている。一時は怒って署名した Isidore も冷静になって11月1日には和解の手紙を書いた。この中に私の露出が1日かかるところが、Daguerre の方法では4分で済むなどとある。

Daguerre はあとで抜け目なく「ダゲレオタイプ教本」にこの手紙を、Nicéphore のヨウ素を諦めたという内容の手紙4通とともに収録した。これも Isidore が怒って当然である。しかし公平に見ると少くとも金に関してだけは折半であるから、Daguerre も寛大だったと言わねばなるまい。

## 7. 「ダゲレオタイプ」公表と Bauer の Niépce 弁護

「最終契約」の定めるところに従って予約を募集してみたが、思うように事は運ばなかった。結局は Daguerre の広い顔と強引だが明るい性格が物を言って、D. F. J. Arago (1786-1853) の後援を得るのに成功した。

Arago はそのころパリ天文台長であり下院議員でもあった。Arago のパリ天文台には大学を出たばかりの Talbot (21歳) が数週間滞在して観測させてもらった事もある<sup>(32)</sup>。Arago の案はフランス政府に特許を買い上げてもらって、その見返りとして Daguerre と Isidore に年金を支給しようという物である。それには先ず内務大臣 Duchâtel の承諾を得る必要がある。そのあと下院、上院の議決を経て王の署名の付いた法律にしなければならぬ。

それには何より科学学士院の賛同を得るのが先決である。Aragoの科学

学士院での説明は1839年1月7日の月曜日例会で行なわれた。この詳細は科学学士院紀要「Compt. rend.」に見ることができる<sup>(33)</sup>。しかし内容はダゲレオタイプの效能書を述べたに止まり実際の操作法に触れるところは全くと言ってよいほどない。

この Arago 報告の要点は事前に触れて、発表の前日1月6日（日）「Gazette de France」誌の記事になった。記者 H. Gaucheraud のスクープである。この記事の全訳は私の小論「写真発達史における1839年という年」中京大学「教養論叢」第29巻、第2号（通巻83号）の中にある<sup>(34)</sup>。

ただし、この記事の内容も Arago の報告と同じように具体的内容に乏しい。感光材が紙でなく金属板だとか、露出が3分間で後処理は洗浄かと言う程度である。

1月6日パリ「Gazette de France」誌のスクープ記事は英訳されて1月12日にはロンドン週刊誌「Literary Gazette」に載せられた。

これを見て驚いた1人に Henry Fox Talbot (1800-1877) がいる。彼は1833年イタリアに新婚旅行に出かけて Como 湖畔で写生をした。このとき暗箱写生器を利用したがうまく行かなかったので、このスクリーンに映る映像を何んとか固定でない物かと考えた。帰国後1834年から実験を始めた。彼の方法では紙を使う。Niépce 兄弟が1816年に始めたのと同じである。この紙に食塩水を浸ませ、その上に硝酸銀水溶液を塗って紙の中に塩化銀を沈着させる。この塩化銀紙が感光材である。やがて彼は重要な発見をした。薄い食塩水に浸した紙の上に、濃い硝酸銀水溶液を塗ると感光性の良い感光紙ができる。この反対に薄い硝酸銀水溶液を塗った紙の上に濃い食塩水を塗るとほとんど感光性のない紙ができた。この現象は「定着」に利用できる。

露出したあとで濃い食塩水を塗ればよいのである。彼は自分の方式を「光写生」(photogenic drawing) と呼んだ。これで明るい陽光の下なら30分ほどの露出で建物のシルエットが撮れることになった。しかし余り進展を見ないまま1838年暮には「今まで行なったことを速報に仕上げ、これを王立学会に提出しようという考えに落着いて」いたところであった。

この矢先、1839年の年が明けると早そうに銀板写真のニュースがパリから届いた。慌てた Talbot は1月31日王立学会の例会が待ち切れず、友人

の Faraday に頼んで1月25日王立研究所金曜日例会のあとで紹介してもらった<sup>(35)</sup>。その一方でフランス科学学士院の Arago, Biot, A. von Humboldt にも1月29日付で手紙を書いて自分の優先権を主張した。

この手紙は2月4日科学学士院月曜日例会で Arago が読んだ。また1月30日には明日が王立学会への発表の日だと言うのに「Literary Gazette」誌に長文の手紙を書いている。これが2月2日に出た。この中で自分の仕事について次ぎのように言う。

「これらのどれもが全く人間の手を借りずに作られたのだと知ったら、アラジンの魔法のランプの力を借りたのだと想像するに違いありません。」

1月31日王立学会での発表は長い物であったが、ここでは使った薬品や手法の詳細については全く触れるところがない。発表の次ぎの日、2月1日には John Herschell を Slough 邸に訪問して、彼の作品を見せてもらい、ハイポ（チオ硫酸ナトリウム）を使う彼の定着法の実演までしてもらった<sup>(36)</sup>。ただし Talbot の方は自分の定着法を教えていない。

しかし、その内に明るい陽光の下で建物を撮るのに30分もの露出を必要とするようでは、実用にほど遠いと考えたのであろう、自分の手法を公開することにした。この時分 Talbot は Daguerre の方もすぐに公表するだろうと予想していたのである。

Talbot が王立学会総務 S. H. Christie に書いた手紙は2月21日に王立学会で読まれた。これも余り詳しい物ではないが、使う薬品や操作の大体は分かる。この中で Talbot は食塩水定着の他にヨウ化カリウム水溶液を使う定着法も報告した<sup>(37)</sup>。

パリからのニュースを報じた「Literary Gazette」1月12日号を見て驚いたのは Talbot ばかりではない。11年前のちょうど今ころ Niépce 夫妻がロンドン滞在中に世話をした植物学者 Bauer もその1人である。記事の中で Arago は Niépce の業績を過少に評価していた。

「ただし、これは非常に不完全な物だったので、その目的を達成するまでには、長くかつ忍耐深い努力を必要とした。」

それで Bauer は「Literary Gazette」誌の編集者に手紙を書いた。Nicephore の死は6年前であるのに Bauer は知らなかったらしい。「追伸」に



この手紙を書いたあとで知ったとある。2月26-27日付のこの手紙は3月2日号(土)に掲載された。Isidore「パンフレット」には、そのフランス語訳文が収録されている。BauerはNicéphoreを弁護する。

「しかし、15年前にNicéphore氏がそんな不完全なアイデアを(中崎注: Daguerreに)与えたとは、私には思えないのです。1827年にNiépce氏がイギリスに持って来た見本(私はその内のある物をまだ持っております)は1839年のフランス新聞が報じているDaguerre氏の作品に劣らず完全な物でした。」

Bauerはさらに別れるときにNicéphoreにもらった自筆の王立学会提出メモを翻訳して、自分の手紙のあとにつけた。これはIsidore「パンフレット」で省略されている。

BauerはまたTalbotの「光写生」に関する記事も読んでいて、その手法は「Niépce氏の発明と同じ原理の上に立っているようだ」と推測した上で、興味ある人は自宅にまで来てくれたらNicéphoreにもらった試作品などを見せようと付け加えた。

Talbotは3月7日付でBauerに手紙を書いて参上しようと告げる<sup>(38)</sup>。

「あなたは私の『光写生』をまだ見ておられないようです。よかったら次ぎの土曜日(中崎注: 3月9日)に友人Wheatstone教授と一緒に訪問します。そのときには私の作品を持参しましょう。」

この訪問は実現せず、結局Wheatstoneの配慮で同じ3月9日(土)王立学会の夜会(soirée)でTalbot, Herschelの作品と一緒にNicéphoreの作品と自筆のメモを展示する運びになった。この夜会「懇話会」は新しく王立学会会長になったNorthampton侯の主催で開かれた最初の夜会であった。

Isidoreはこの時の模様をBauerから短かい手紙で知らされたのであろう。4月12日にパリから手紙を書いて感謝した<sup>(39)</sup>。

「しかし正義をながく見捨てない神慮があって、これがあなたの同国人Talbot氏を出現させたのです。優先権の問題が持ち上がり、これに解答が与えられなければなりません。父の名前はDaguerre氏に対して守られなければなりません。そして長く放り込まれていた忘却の中から、これを取り出すのが急務です。父の事業は25年にもまたがるのです。こ

れは確認されねばなりません。また契約条文もあります。これも明か  
みに出さねばなりません。そして最後に、彼こそがいま賞賛を浴びて  
いるこの発明の、唯一にして真の発明者である事が証明されねばなりませ  
ん。これで父の名前は濃霧のあとの太陽のように再び現れるのです。こ  
のとき私は驚喜し満足いたします。私の目的は達成されたのです。私は  
Talbot 氏に心から感謝します。もっとも、彼は私にどれだけの慰めを  
与えたかに、ほとんど気が付いていないでしょうが。」

この「濃霧のあとの太陽」が「弾劾パンフレット」の表題の上の「暗闇の  
あとの光」(post tenebra lux) と姿を変える。この手紙に対する Bauer  
の4月24日付返事はフランス文である<sup>(40)</sup>。

「この発表はイギリス全土の新聞、とくに芸術家の注意を引きました。つ  
いで3月9日には Northampton 侯が王立学会会長として最初の夜会  
(soirée) を開催しましたが、このとき集まった人びとは王立学会会員だ  
けでなく、この時期ロンドンにいた多くの学者、芸術家、それに貴族の  
方がたでした。ここで私はあなたの父上がヘリオグラフ法で作られた4  
枚の作品と同時に、彼が私に書いてくれた自筆のノートを展示いたしま  
した。かってイギリスではこのアイデアは無視されたのですが、この  
とき集まった人もだれ1人としてこの手法を知らなかったので、この展  
示は集まった人びとに大変なセンセーションを引きおこしました。そし  
て人びとはダゲレオタイプは軽蔑に値する剽窃以外の何物でもない事に  
意見が一致し、そう口にする人もいました。ですからイギリスではもは  
や、この名前でこの方法を呼ぶ人はいないと信じます。」

イギリスで王立学会「夜会」のあった3月9日の前日、3月8日パリでは  
ジオラマ館が全焼してしまうという事故があった。ジオラマ館の火事はこ  
れはこれで、かえって良かったのかも知れない。7月には傾きかけていた  
経営を打ち切ってしまった。それにこの不幸で同情が集まり、これが法案  
の通過に好都合に働いたのも事実である。

下院を7月9日、上院を8月2日に通過した法案は、8月7日に国王  
Louis Philippe の署名が付いて成立した。下院で説明したのは Arago,  
上院で説明したのは化学者 Gay-Lussac である。

年金は Daguerre 6000 フラン、Isidore には 4000 フランであった。

2000 フランの差は Daguerre がジオラマ手法を公開したからである。成立した法案の第3条には公開講演が義務づけられていた。これは法律が成立したあと2週間ほど経った8月19日に行なわれた。講演者はもちろん Daguerre のはずであったが、彼がいろんな理窟をつけて辞退したので Arago が代行した。このときの講演の記録はどのような訳か残っていない。われわれがその概要を知ることができるのは、7月3日 Arago が下院でした報告の速記録とこれにあとで付け加えた脚注だけである。これは科学学士院紀要に載っているから読むことができる<sup>(41)</sup>。この中に操作法が少しは説明されているものの抽象的な部分が多く、招待者で満員だった講堂の聴衆の不満をかった。しかし、これは次ぎの日に出た79ページの操作手引書「ダゲレオタイプ教本」<sup>(42)</sup>によって癒された。

「Historique et Description des Procédés du Daguerreotype et du Diorama」(1839)

この小冊子は実際的に書かれていて、誰でもすぐに実験できるようになっていた。

## 8. 「ダゲレオタイプ教本」と Isidore 「弾劾パンフレット」出版

操作説明書「ダゲレオタイプ教本」には図版が6つも付いていて、そこにはカメラを始めとして必要な器具が寸法入りで詳しく図解されている。その上に操作の説明は親切で、誰でもすぐに実験できるように配慮されていた。この本がたちまち版を重ね、その年の内に4ヵ国語に翻訳されたのも当然である。世界的な大ベストセラーだったのである。

フランス語版にも種類が多い。これらの版については B. Newhall の詳細な研究がある<sup>(43)</sup>。

しかし「ダゲレオタイプ教本」は単なる操作の手引き書だけではない。手引き書の部分は後半の4分の1に過ぎず、前の4分の3は年金法案成立史の外観を呈している。まず内務大臣 Duchâtel の法案趣旨説明の再録がある。1839年6月15日付で、これに続いて王の署名がついた年金法案が載っている。これは8箇条からなり、王の署名は1839年6月15日である。

次ぎに Arago が7月3日に下院でした調査報告が記録されている。これは写真発達史から説きおこした長い物で、おまけに数箇所非常に長い

「注」までついている。その次ぎにある Gay-Lussac が7月30日上院で行なった方の記録は短かい。以上が法案成立に関する部分で、このあとに予備契約のときに Niépce が Daguerre に与えたヘリオグラフ法の説明「Notice sur l'Héliographie」が続く。これにはすでに説明したように短かい Daguerre の「前文」が付いている。また本文には長い「注」があって、この中でヘリオグラフ法の不完全であることを暴露している。

その上にさらに Daguerre 自身の「Modifications」が続く。この「改良」には大した物は全くない。ラベンダ油の蒸溜残渣を使い、石油蒸気で現像したら成績が良かった程度の物である。

ここまでで「ダゲレオタイプ教本」の半分であるが、まだ操作法の説明は始まらない。その前にさらに今度は「ダゲレオタイプ成立史」とでも称すべき部分が挟まっている。この「ダゲレオタイプ手法の歴史的背景」と題の付いている部分に、また Daguerre の「前文」が付いている。この中で彼は次ぎのように主張する。目的はもちろん「ダゲレオタイプ」が Niépce 「ヘリオグラフ法」の単なる模倣や改良でなくて、全く独自の発明であることを証明しようと言うのである。

「Daguerre 氏はここに、Niépce 氏がダゲレオタイプの発明になんら関係していない事を証明するために、Niépce 氏の手紙のある物の抜粋を公表する必要があるものと判断した。Niépce 氏の手紙に見るように、Daguerre 氏は彼に1831年5月21日付けの手紙で、銀に接触させたヨウ素に対する光線の作用について示唆している。Niépce 氏の返事は6月24日付けである。上記の手紙の中で、Daguerre 氏は Niépce 氏にこの新しい方法を試して見るように奨めた。Niépce はこれを何度も実際に試みたが、つねに Daguerre 氏の奨めに従ってであった。しかし Niépce 氏の研究はいつも失敗に終わったので、彼はまた Daguerre 氏が不可能としか思えないこの手法を彼に示唆した事によって、無駄になった時間を悔やんだりした。」

そしてヨウ化銀板を使う Daguerre の提案に Nicéphore がいかに消極的であったかを示すために、1831年6月24日、11月8日；1832年1月29日、3月3日付 Nicéphore の手紙4通の抜粋を収録した。これには本物であることを保証する Arago の署名付という慎重さである。その上に

Daguerre が強調したいところは「イタリック」（中崎訳では下線）にしてある。

最後に 1837 年 11 月 1 日付 Isidore からの手紙も付けた。これは最終契約後の敗北宣言である。

「私が撮るのにはほぼ 1 日もかかるのに、あなたはこれを4 分で（中崎注：本当は 20-30 分のはず）してしまうのです。何と大きな進歩でしょう。それは余りにも優れているので、この両方法を知ってからは、恐らく誰も古い方法を（中崎注：ヘリオグラフ法）使いたくないでしょう。」Daguerre は「前文」の最後の方で 1837 年 6 月 13 日 Isidore との間に関わされた最終契約に触れて次のように言う。

「またこの契約の中には、Daguerre 氏が事実上の唯一の発明者だという理由で、この手法に Daguerre 氏だけの名前を付けると明記されている。」

だからこの「ダゲレオタイプ教本」の表題のように「Daguerréotype」という名前だけで正しいという主張である。

これまでが「教本」の 4 分の 3 で、残りの 4 分の 1 で操作の説明をすることになる。この「教本」の出版については Isidore と相談をした。しかしこんな内容では Isidore が納得する訳がない。数日にわたって激しい遣り取りがあったらしい。しかし Daguerre は Isidore の承諾を得ないままに出版してしまった。しかも Daguerre は無断で Nicéphore だけでなく Isidore の手紙まで公表し、自分に都合の良いところはイタリックにして強調している。おまけに、やっと予備契約のときにもらって、鬼の首でもとったように喜んだ「ノート」に「注」をつけてケナした。

これでは Isidore が怒って当然である。

「ダゲレオタイプ教本」を手にした Isidore はすぐに母親に手紙を書いた。この 1839 年 9 月 8 日付手紙で彼はこう言う。

「Daguerre 氏は 1 冊の小冊子を刊行いたしました。それには、次ぎが書いてあります。1. 私の父の手法、2. 父の改訂方法、3. Daguerre の手法、最後にジオラマ操作法。これについては、数日間に渡って激しい議論をしたのでした。私は彼をやっつけてやりました。誠実について良心のかけらもない人間の常として、彼は様子を変えました。私が冷静で

あるのを見て取ると、彼は傲慢で怒っぽくなり、また私が彼の過去や現在の行為によって苛立ったり怒るのを見ると、折れて私の機嫌を取りました。私は勝ったのですが、勝利で得をする術を知らなかったのを、白状しなければなりません。2人は友達のように別れたのですが、彼は私に知らない内に、あの小冊子を用意していたのです。その中には彼のノートに加えて、父と私の手紙を付け加えていたのです。私には、これらから彼のずるさと忘恩、そして父の栄光と奪おうとする彼の欲望が正しく判断できるのです。それで、私は彼の行動を世に知らせ、父の発見に対する彼の批判が世間に与えた過った印象を訂正するために、論文を出版する必要があると考えました。」

こうして「ダゲール剽窃弾劾」パンフレットが出版されることになった。この1841年夏、Nicéphore が死んで8年、Isidore 36歳、母親の Agnès は86歳の高齢である。

### 9. Isidore 「弾劾パンフレット」とその問題点

すでに説明しておいたように Isidore 「ダゲール剽窃弾劾パンフレット」は友人の間にだけ配った物であったから刷った部数は少なかった。私が翻訳に使用したテキストは大英図書館の好意で手に入れることのできたマイクロフィルム版であるが、最近では「Sources of Modern Photography」シリーズの1冊の中に収録されるようになって見るのに便利になった<sup>(44)</sup>。

A. R. Sobieszke 「The Prehistory of Photography: Original Anthology」(1979)

私は Isidore 「パンフレット」の実物を手にした事がないが、写真から判断する限りでは紙表紙の粗末な装丁らしい。上欄のページ番号で36ページの「3」の字が上下反対に印刷されていたりする。また10ページ目の自分の家系を説明するところでは Isidore の伯母や叔父の生年や名前ところが空白のままである。あとで書き加えるつもりだったのであろう。引用ページにも誤りが発見される。こう言うところから、よほど印刷を急いだのではないかという印象を受ける。これは論旨の進め方とか、文章の調子などからも酌みとれる。一体に冷静に事実を挙げて Daguerre の剽窃や忘恩行為を追求する姿勢より、いかにして自分および父親に加えられた屈辱

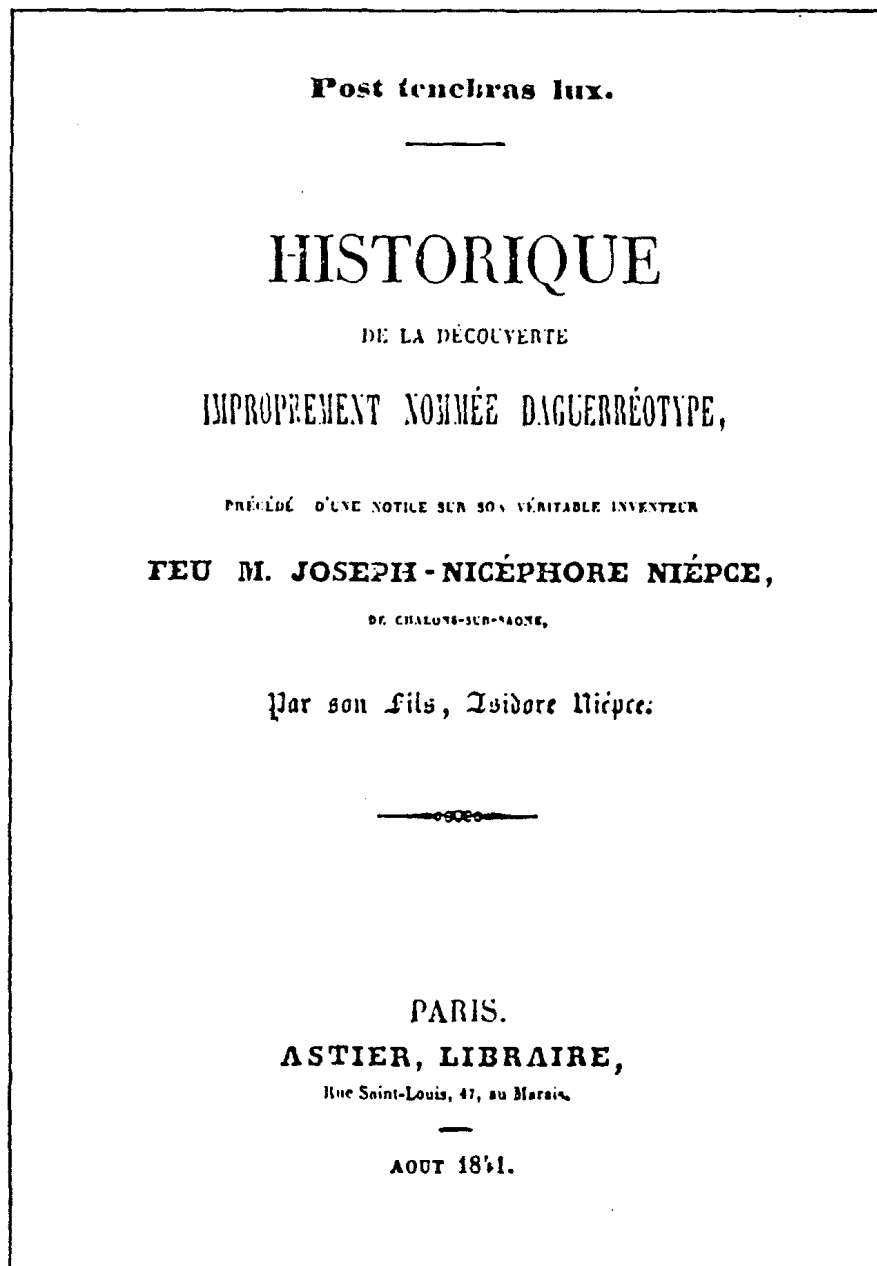


図1. 「不当にもダゲレオタイプと名付けられた発明の歴史」表紙

をそごうかという感情ばかりが先走りし過ぎている。

同じ事は25年もあとで出る Fouque 「真相」についても言える。

図1はこの表紙で、その翻訳が図2である。扉表紙の最上段に標語「暗闇のあとの光」がある。内容は「付録1」全訳を読んでもらえれば分かる事であるが、以下に箇条書にしてその筋書を簡単に辿ってみる事にする。訳文の中で下線の箇所は原文にイタリックの箇所である。また原文では「注」は全て各ページ毎に番号を付けた「脚注」であるが、私の訳文ではこれを通し番号の「脚注」に改めた。肩付きの「注」は私の付けた物で、そ

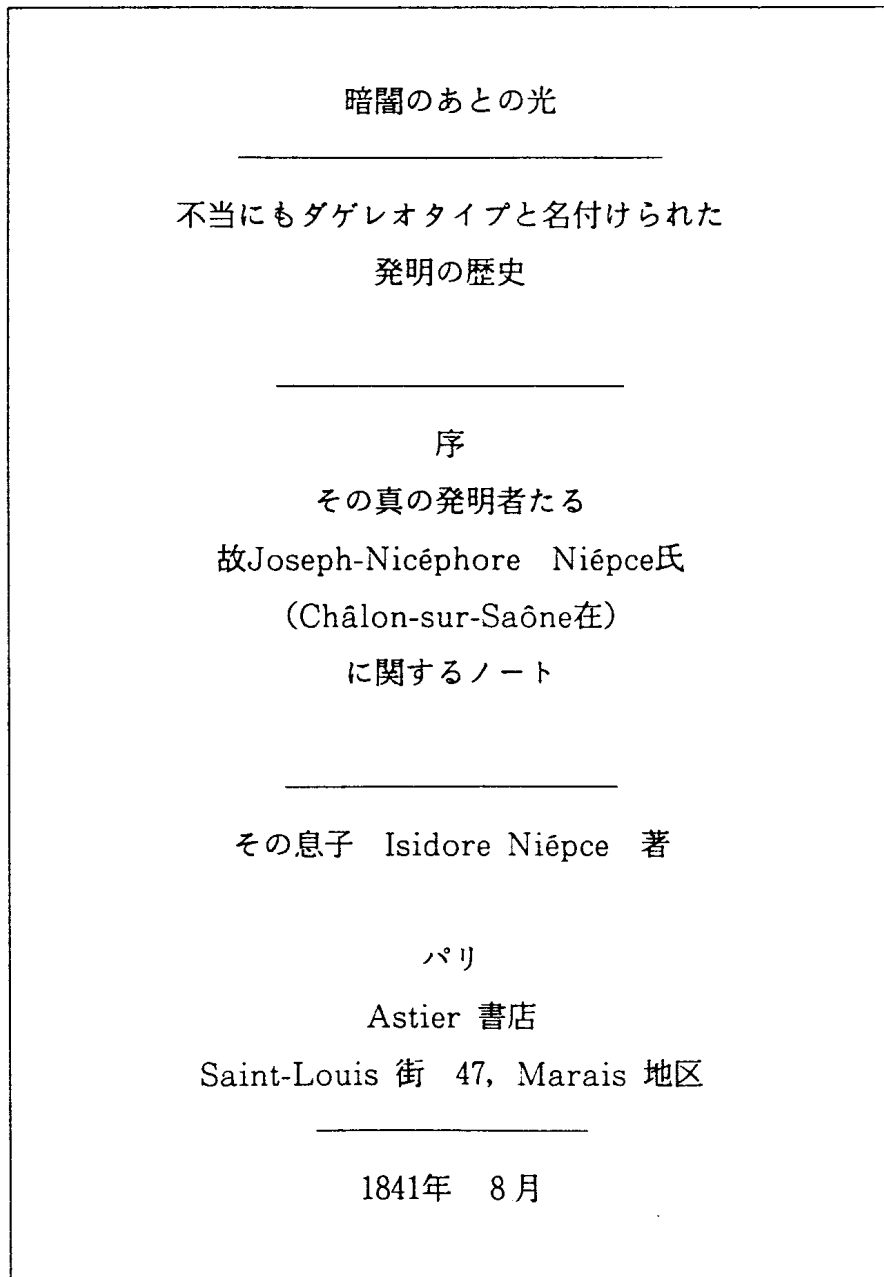


図2. 「不当にもダゲレオタイプと名付けられた発明の歴史」表紙翻訳

の説明は「文献と注」に記載してある。

1. 5-8 ページ (原文のページ数): ここには「序文」と表題が付いてないが、それにあたる箇所である。ここで Isidore は始めから Daguerre に対する怒りをぶっつけている。

2. 9-15 ページ: 始めに「J. -N. Niépce 氏の生涯とその業績」という表題がある。このあとには表題らしい物がないから、これは以下の全ての内容にかかる表題であろう。次ぎに Nicéphore, Claude 兄弟の誕生, 父, 母のことが簡単に記されている。続いて兄弟のフランス革命以後の経歴が記



録される。内燃機関「ピレオロホール」は名前だけで内容の説明はない。次に1807年12月31日 Carnot からの手紙が収録されている。あと大青インジゴ栽培の事があって、これに関して内務大臣から知事あての兄弟に対する感謝状2通が収録されている。

Isidore にしたら一家の誇らしい記録なのであろう。

3. 16-21 ページ: ここでは Nicéphore が1826年 Daguerre と交渉を持つまでの写真研究の経過が述べられている。しかしその途中で暗箱写生器を使って写真を撮る話が出てくると、急に年代をとばして1827年6月4日付 Daguerre に宛てた手紙の抜粋を引用したりする。この同じ手紙はあとでもっと完全な形で引用されるのである。このあと元にもどって例の1826年1月 Niépce 大佐の Chevalier 店での出来事から Daguerre との文通の話になる。このあたりは Daguerre の書いた手紙の内容とか、それに対する Nicéphore の対応が分かって面白い。

Isidore がここで強調したいのは、1829年12月予備契約成立のときまで Daguerre は写真らしい物を1枚も Nicéphore に示した事がなかったと言う事実である。事実このころ Daguerre は他人に見せられるほどの仕事は何もしていなかったのである。

4. 22-28 ページ: ここでは Nicéphore が Daguerre に書いた2通の手紙の抜粋が紹介される。文通初期の1827年2月3日、6月4日付手紙である。ここで Isidore が力説したいのは、この時分すでに父親がカメラを用いて「自然を撮る」ヘリオグラフ法を完成していた事実である。ただ Isidore にとって残念なのは、この時分に Daguerre が書いた懇請の手紙がないのでこれを引用できないことであろう。Nicéphore がこのあと1827年8月パリ滞在中ホテルの大便所の中に落してしまったのである。

続いて Isidore は父親がロンドンで植物学者 Bauer と知り合ったこと、帰路パリで Daguerre と再び会ったが得るところは何もなかったことなどを告げる。これから2年して2人は共同研究契約に入るのであるが、Isidore によるとこれは Daguerre のハッタリとペテンに Nicéphore がのせられた事になっている。Isidore はその証拠として Daguerre の1829年11月15日付手紙の抜粋を挙げる。

「この改良は今までの暗箱写生器のどれと比較しても、3倍の力を発揮

します。」

5. 29-38 ページ: 始めに 1829 年 12 月 14 日署名の予備契約の全文が収録されている。これはこの「弾劾パンフレット」で始めて公開されたものである。Isidore がこれを公開した目的は 2 つある。その 1 つは契約前文の次ぎの個所にある。

「Niépce 氏は画家の手を借りないで、新しい方法により自然の景色を固定する目的で、かなりの研究をし、この発見を裏付ける多くの作品を得ている。この発見は暗箱写生器の中に受けた映像を自動的に再現する事にある。彼からこの発見を知らされた Daguerre 氏は、大いに改良の余地のあるのに興味を持って、これを完成させこの新しい企業から得られる全ての利益に与ろうとして、協力を申し出た。」

ここには Nicéphore がすでに暗箱写生器の映像を自動的に再現した作品を得ていた事が明言されている。Daguerre 自身も Daguerre に依怙鼻屑をしていた Arago も、Nicéphore が力を入れかつ成功していたのは、版画の密着焼き付けによって腐刻板を作り、これからプリントを作る方面だけだったとあらゆる機会に強調していたのである。

次ぎに Isidore が問題にしたのは、この時までの Nicéphore と Daguerre の実績である。

第 3 条。この契約の署名された時点で、Niépce 氏は Daguerre 氏に自分の発見の原理を封印したうえで、教えねばならない。

第 6 条。この契約の署名の時点で、Daguerre 氏は Niépce 氏に暗箱写生器の改良の原理を公開し、その改良の性質についての正確な書類を手渡さねばならない。

第 3 条に従って Nicéphore は「ノート」を提出した。これは Daguerre が咽喉から手が出るほどに欲しかった物である。ところが Daguerre の方と来たらまだ完成もしていない、実質のまるでない「暗箱写生器の改良の原理」の公開だけである。これは Isidore の言うとおりに不公平である。

さらに第 1 条には「Niépce-Daguerre なる商標の会社を設立する」と規定されている。このときは Niépce の名前が先頭にある。

6. 39-43 ページ: ここで Isidore が主張するものは、Daguerre が自分の改良カメラと称していたのは、15 年も前の Wollaston 発明「ペリオス

コピック・レンズ」付カメラに外ならないと言う事実である。このレンズは現在の老眼鏡と同じ凸凹レンズである。これをカメラに装着するには凹面が外側を向くようにする。Isidoreはこの原理を説明するのに Wollaston 1812年発表論文のフランス語訳を付録として収録している。

予備契約の時点で Daguerre が Nicéphore に与えた「暗箱写生器の改良の原理」を書いたノートは残っていない。おそらく Isidore の言うように Wollaston ペリオスコピック・レンズに近い物を説明した文書だったのであろう。Isidore は父親からそう聞いていたから、ここにそれを書いたに相違ない。残っている手紙によっても Daguerre の提案しているカメラの改良には大した物が全くないことが分かる。彼にそんな光学上の知識を要求するのが無理である。Chevalier 店で仕込んだ知識をそのまま伝えたというのが真相であろう。

7. 43-47 ページ: Isidore はここで予備契約のときに Nicéphore が Daguerre に手渡した「ヘリオグラフ法についてのノート」に触れる。Isidore の言うように Daguerre の最大の目的はこれを手に入れる事であった。しかも Isidore は次ぎの重大な論点を「脚注」に入れたままにしている。忘れていて急いで付け加えたのかも知れない。

「もし Daguerre 氏が Niépce 氏の発見について教えられなかったら、今日の名誉に価する完成までにとでも到達できなかつたに違いない。」これは後世のわれわれが公平に判断して Isidore の言うとおりでである。だからと言って Daguerre の独創「水銀現像法」発見という輝かしい業績の光が減少する物では無論ない<sup>(45)</sup>。Daguerre の悪いところは、これを卒直に認めないで、逆に「ダゲレオタイプ教本」に「前文」や「注」を付けて、この中で Nicéphore 「ヘリオグラフ法」にケチをつけた事である。なるほど Daguerre の言うように 1829年の段階では「ヘリオグラフ法」は不完全であったかも知れない。しかしこの方法が知らされなかつたら、Daguerre が自分の「ダゲレオタイプ」に到達しなかつたのも同じように事実である。Daguerre がこの時分にできたことと言ったら、せいぜい燐光物質粉末を使って手品まがいの実演を披露する程度であった。

8. 47-56 ページ: 予備契約から 4年も経たないのに Nicéphore が 1833年 7月に死んでしまった。あと 2年して「水銀現像法」を不完全ながら成

功させた Daguerre は、Isidore をパリに呼び寄せて追加契約に署名させた。この 1835 年 5 月 9 日署名の追加契約では商標が「Daguerre-Isidore Niépce」と変った。この追加契約と次ぎの 1837 年 6 月 13 日に Isidore が署名を強要された最終契約は両方とも「パンフレット」に収録されている。最終契約では「新方法には Daguerre の名前」だけを付ける事になった。この辺の Isidore の記述は Daguerre の駆け引きが分かる面白い読物になっている。

9. 56-60 ページ: これが本文で最後の部分である。ここで Isidore は予備契約に先立つ 1826 年から 1829 年 12 月までの Daguerre の手紙は全て Nicéphore の発見を盗むために「巧みにしかも辛抱強く仕掛けた罠だった」とまで言う。そして次ぎに奇妙な議論を始める。すなわち銀板写真で使うヨウ素はヘリオグラフ法のアスファルトの代用品で、水銀蒸気はヘリオグラフ法の溶媒洗浄に他ならないと言うのである。化学的に考えると明らかに誤りである。たとえばアスファルトは単に銀板の上に物理的に付着しているだけだが、ヨウ素は銀と化学的に結合してヨウ化銀という別の化合物に変化している。水銀現像の水銀蒸気も同じで、単に洗浄だけでなく水銀アマルガムという別の物質に変っているのである。

「パンフレット」から 25 年ほど経って書かれた Fouque「真相」(1867)でも Fouque は同じ議論を展開している。化学知識の乏しい彼らはこう信じて疑わなかったのであろう。

しかし広く解釈すると彼等の論点も肯けなくもない。カメラからの映像を金属板上に印像し、これを何らかの手段で目に見えるように「現像」というプロセスは Nicéphore の独創だからである。

「弾劾パンフレット」本文は次ぎの言葉で終わる。

「そうなのだ。Joseph-Nicéphore Niépce 氏こそが、暗箱写生器の中に受けられた映像を、光の作用によって、白から黒におよぶ諧調のままに、自動的に再現する発明の真の発明者なのである。

そして Daguerre 氏の方法は、この驚嘆すべき発明の驚嘆すべき改良に他ならない。

勲しある人に栄冠を (Palmas qui meruit ferat)。

Isidore「弾劾パンフレット」には、このあとに2つの翻訳付録が付いている。1つは Bauer の手紙であり、もう1つは Wollaston 論文である。Bauer手紙の方は植物学者Bauerが1839年2月27日ロンドン週間誌「Literary Gazette」に出した Niépce 弁護である。このフランス語への翻訳は Isidore がしたのかどうか分らないが、全体に忠実な全文翻訳である。ただ私の翻訳は「Literary Gazette」英語原文からした。それで Isidore「パンフレット」にはない編集者の前文をそのままにして入れておいた。なお Bauer の手紙にはロンドン滞在中の Nicéphore が王立学会に提出したメモ「ヘリオグラフ法についてのノート」の翻訳が付いていた。

Isidore はこれを省略しているが、私の小論の最後にある「付録2」はこの全訳である<sup>(46)</sup>。

Wollaston 論文の方は1812年6月11日王立学会で読まれた英文報告のフランス語訳抜粋である。

「On a Perioscopic Camera Obscura and Microscope」(1812)<sup>(47)</sup>  
Isidore「パンフレット」に収録されているフランス語訳は Charles Chevalier が1829年に出版した小冊子から採った物であると言う。

「Extrait de la notice sur l'usage des Chambres obscures et des Chambres claires」(1829)

「パンフレット」に載せてあるのは Wollaston 論文の序文のところを除いたあと半分ほどの全訳である。Wollaston 原文には簡潔すぎて分かりにくい所がある。Chevalier はこれに少し手を加えて理解しやすいように工夫をしている。それで私の翻訳でもこの部分は Chevalier フランス語訳に従うことにした。このあとに Chevalier 図版、第7図、第8図が掲載されているが、私の翻訳では省略した。これは Wollaston 原図で第1図、第2図にあたる物である。

### おわりに

年金をもらうようになると直ぐに Daguerre はパリ東郊マルヌ河畔の Bry に引き込んだ。パリにはときどき芸術家の集まりに出て来るだけで、自分で写真を撮ることは少なかった。もしパリで写真館を開業したら、彼のことだから大繁盛したに相違ない。

10年ほど Bry に住んで、1851年7月10日心臓発作で死亡した。64歳であった。そして1855年には Nicéphore の妻 Agnès が死んだ。彼女は95歳の高齢であった。Daguerre 未亡人 Louise の方は夫の死後、半分の年金3000フランをもらう事になった。しかし借金が多くてすぐに屋敷を売り払って、その隅のスタジオで暮らしていたが、1857年に67歳で死亡した。

Isidore が死ぬのは1868年(明治元年)である。彼も73歳になっていた。死の1年前、1867年には Fouque 「真相」が出版されている。

この本の扉を飾っているのは、Isidore が刻んだ父 Nicéphore の胸像の「写真」である。

Isidore 「ダゲール剽窃弾劾パンフレット」本文の翻訳に際して、中京大学教養部伊藤 進教授からご助言を賜った所が4箇所ある。しかし数多く発見されるであろう、誤りについての責任は全て私自身にあるのは言うまでもない。私のフランス語は40年前に大阪大学医学部の階段教室で、半年間ほど講習を受けただけの物である。この機会に忌憚のないご叱正が戴けて、訳文を少しでも完全な物に近づける事ができたら幸いである。この「写真シリーズ」論考を書くにあたって、いつものように富士フィルム株式会社足柄研究所 安達慶一氏には大変にお世話になった。また文献の収集では大阪大学付属図書館 参考係 南谷照子、東田葉子、和田山祥子、中京大学付属図書館 平田伸夫の諸氏から多大のご援助を賜った。

この機会に、これらの皆さまに厚く感謝の意を表する次第である。

## 付 録 1

### Isidore Niépce

#### 「不当にもダゲレオタイプと名付けられた発明の歴史」

(1841年8月刊) (翻訳)

この重要な発見が発表されてから、すでに2年が経ってしまいました。これは世界中の学者および大衆の興奮を極度にまで刺激した物でした。

Daguerre 氏によって発表された最初の重大な結果に与えられた賞賛、人びとが進んで彼の頭上に飾り付けた栄光のオーロラーなど、この高慢と虚栄に駆られた1人の男に軽率にも捧げられた名誉の数かずは、多くの心ある人びとの怒りを誘っています。

この人びとは長年にわたる J.-N. Niépce 氏の努力を認めていて、友人であり親でもあるこの同郷人が、困難で精励な 20 年におよぶ研究のすえに始めて得た、その名誉を奪ったマキャベリズムに対して、正義の行われん事を願っております。新聞にその抗議を書かせない事に、この人びとが同意したのは、私がそう頼んだからに他なりません。

Daguerre 氏と私の間には、もはや何の関係もありませんから、私は自分自身で事実を公表する約束をいたしました。私はこの約束を実行せねばなりません。それは私の父の思い出を大切にするためでもあり、人びとが示してくれた優しい関心に報いるためでもあります。Daguerre 氏の天才を攻撃しようなどとは、まったく思っておりません。私が彼に対して抱いている優越感によって、誤りを犯さないように考えているだけです。

Daguerre 氏がその第 1 条の規約にも係わらず、追加契約で不当不実にも Niépce 氏の名前に代えて、自分の名前を付けようと企てたとき、私はこのような強奪に対して全力で反抗しました。しかし、ここでは言いたくない動機のために、譲歩を余儀なくされたのです。

私は父との契約の破棄に反対して、正当な正義が行われるように、全ての法律的手段に訴えようと誓いました。その時に私に答えた言葉を Daguerre 氏は覚えているでしょうか。これが、それです。「そのとおりだ。その思い出が君にとってと同じように、自分にとっても懐かしい方に対して、これとは別に振る舞ったら、自分は君の事を良く思わないだろう。」

その行動と抵触しなかったら、とても立派な考えなのですがね！

Daguerre 氏よ、私は良心に従います。ですから、あなたの非難にも係わらず約束どおり、あなたの言われたとおりに行動しているのです！ 私は良心に従います。ですから、それを守りましょう。と言うのは、私は真実であり、証明できる事しかしゃべらないからです。私は暴露パンフレット作家の常套手段である揚げ足とりはいたしません。ですから、私はあなたが大胆にもそれに自分の名前をつけた発見の本当の発明者が、私の父なのか、あなたなのかを証明する以外の事はしようとは思いません。

Daguerre 氏よ、あなたの名誉にとっては忘れられた方がよかったかも知れない事実を、暴露してしまっていて御免なさい。ただ私は遅まきであろうとも、あなたのにとって大変に不都合かも知れない全ての真実を、公表

すると言う約束を果たしたかったのです。事実、あなたの勝利のときに私が発表していたら、人はこれを無謀で私の妬みからだとなじったに違いありません。しかし、あなたが裁判所に告訴する気遣いはいたしません。

運良く私はそこには縁がないのですが。

妬み！一体なにに？ 私の父の評判に対して？ 私は赤面することなく認めます：父の所に回復されるべき名誉、もう一度率直にいいますが、あなたが巧妙にも自分だけに独占しようと企んだ名誉に対してです。しかし、感情だけに訴えるのは褒めた事ではありませんし、あなた自身もこれは言葉にして同意しておられます。

著名な人びとが、権威ある文献(1)によって、Daguerre氏が誇張した見せかけの真実は存在しない事を、彼らの文章によって証明しております。そして私の父の名前を主張して、彼が父から奪おうとした名誉を回復するように要求しています。

真実の勝利の前に栄冠を捧げ、もう言葉の届かないあの慎ましい才能を尊敬する心優しい人びとよ、私の心からの感謝の気持ちを受け取って下さるよう願います！

#### J. -N. Niépce 氏の生涯とその業績

私は自分に課した計画から、それほど離れてもいない詳細について、これから物語ろうと思う。その主題たるや、アクションも、出来事も、面白い事がなく、ほとんど世間から遠ざかって生きていたある人間に関係した事柄に付き合ってもらうだけである。

その人の存在は、ある点からすると荒地に生えていた珍しい植物に似ていなくもない。それは貴重な種子の他は後に残すことなく、花開きそして枯れてしまった。しかも飢えた旅人が、その萎んだ茎からそれを奪ってしまったのであった！

---

(1) 次ぎを見よ。「Gazette de France」1839年1月6日；ロンドン「Literary Gazette」1839年3月2日号 これには王室学会会員 François Bauer 氏の1839年2月27日付けの手紙が掲載されている；年報1839年10月2日号；公報1839年10月2日号。



貴族で王室顧問官 Claude Niépce 氏は Châlon-sur-Saône 判事, 大法官に任命され, 著名な弁護士である Claude Barrault 氏の娘 Claude-Ann Barrault 嬢と結婚した。この結婚によって Claude Niépce が 1763 年 10 月 10 日に生まれた。彼は未婚のまま 1828 年 2 月 5 日 ロンドン近郊 Kiew で死亡した。機械学を専攻した。Joseph Nicéphore-Niépce 氏は 1765 年 3 月 7 日に生まれ, 1833 年 7 月 3 日 Châlon-sur-Saône 近在 Gras 荘園で死亡した。柔和で機知そして多分に聡明な快活さに恵まれ, 彼は慎ましさに加えて慈善家の特性を備えていた。その生涯は夫としても, 父としても情愛深いものであった!

詩と機械学, それに化学をこよなく愛した。

Bernard Niépce, \_\_\_\_\_ 生まれ, 健康を害してジュネーブで死亡した。<sup>(48)</sup>

\_\_\_\_\_ Niépce 嬢, パリにて \_\_\_\_\_ に死亡した。

Joseph-Nicéphore Niépce 氏は政治上の混乱を避けて, 故郷では得られない平安を戦場に求めた。1792 年 5 月 10 日歩兵第 42 連隊 (以前の Limousin 連隊) 少尉 (sous-lieutenant) に任命され, 1793 年 5 月 6 日付けで第 83 師団第 2 大隊付き大尉に任じられ, その資格で Cagliari (サルジニア) の戦闘に加わり, さらに 1793 年にはイタリア戦線に参加した。そして同年 6 月 8 日と 12 日の攻撃で活躍した。

革命暦第 2 年風月 (Ventôse) 18 日 (中崎注: 1794 年 3 月 9 日) Frottier 將軍付き士官に任じられたが, その当時に流行していた熱病に罹って, 成績良好な軍務を辞職するを余儀なくされた。

革命暦第 3 年霧月 (Brumaire) 30 日 (中崎注: 1794 年 11 月 21 日), 当時 フランス領であったニース地方の行政官に任命された。これが彼の健康と生活に良く作用して, 同じころ愛する花嫁と出会って, やがて運命を共にする事となった。ニースで世間の収まるのを待っていたが, 1801 年 6 月 23 日に彼は Châlon-sur-Saône に帰ることになった。このとき妻と子供, それに兄を伴っていた。兄は長年の海上生活の後に弟のところに来ていたのである。こうして 2 人の兄弟は自分たちの科学に対する趣味を満足させるのに協力する事ができるようになった。大変に巧妙な多くの機械が, 一時

も離れない彼らの協力の結果として生まれた。

1806年11月15日、彼らがピレオロホール (Pyréolophore) と名付けた機関の発明に共同で特許を獲得した (物理学会紀要「Memoires l'Institut, sciences physiques」第1期, 1807年, 146 ページ, Carnot と Berthollet の報告をみよ)。

ずっと後になって、彼らはまた「Hydrostatique pompe」と名付けたポンプを完成したが、やがて別の新しいアイデアを追及するに忙しくて、これを中止した!

物理学会会員である Carnot 氏の下記の手紙から、この有名な学者が Niépce 兄弟に抱いていた興味が判断できるであろう。

### Niépce 兄弟宛ての Carnot 氏の手紙

パリ 1807年12月31日

「本月24日にお書き下さったお手紙を拝受いたしました。これで Marly の機関を内燃機関に代えねばならないように思えます。私はあなたがもっと早くこの仕事を、特にピレオロホールの原理を利用することを始めなかったのを残念に思います。この機関はあなたが自慢してよい物でして、全ての機械工がその完成を望んでいる物です。

あなた方の新しい機械について公平に判断し、それを私の公式の意見として表明するのは私には出来そうにありません。あなた方はハズミ車もレバーも使用していません。これは大変な利点ではありますが、他方でピストンとバルブがあって、これは当然のことながら、動力の1部を削減するでしょう。またメカニズムの中に含まれている、『静力学ポンプ』と言う名前に相応しくないハンマーもそうです。

もっとも名前には関係ありませんが。

私が忠告したいのは、これを公表なさる前に、この機械の能力について正確な実験をなさる事です。これこそが、反対を押さえる唯一の手段なのです。あなた方が、その効果が良く知られている水圧ラムと比較なさるのでしたら、なおさらそうです。少なくとも実験的モデルの検査では、これは大変に優秀な機械となっていますが、これが大型のときも同じように優れているかどうかについては、まだ分かっていません。しかし政府が大型についての実験に予算を付けてくれたので、これについてはその内に明らか

かになると思います。Montgolfier氏は、自分が発案した新しい改良の結果、その試験の成功に疑いを持っておりません。これは空気タンクを主とする物で、その主要目的は動力を多く消耗し、しばしば機械を移動させたりするショックを柔らげることにあります。

私の敬意と親愛の情を受け取って下さい。」

Carnot

大青の栽培もまた新しい研究対象となり、彼らはその品質が極上インジゴのそれに匹敵する色素の抽出に成功した。そのころ内務大臣であった de Montalivét 伯爵に知らせたところ、次のような手紙が届いた。

内務大臣より Saône-et-Loire 知事に宛てた手紙

パリ, 1811年9月17日

「Niépce 兄弟があなたに送り、それを本月2日付けの手紙と共に私に送って下ださった大青のサンプルを、急いで担当委員会に送付いたしました。これは de Chanteloup 伯爵が主宰し、染料の国産品を検査する委員会です。委員会の結論が出次第に、これをお送りいたします。その間、Niépce-Barrault 兄弟にこの新しい工業の研究に、彼らが捧げている熱心さに対する私の満足をお伝え下さい。」

署名 Fauchat 代理

1811年11月28日 Niépce 兄弟は内務大臣に大青の栽培と大青インジゴの生産に関する研究の結果を送った。次に大臣の返事を引用する。

内務大臣より Saône-et-Loire 知事に宛てた手紙

パリ, 1811年12月7日

「11月28日に貴官が送ってくれた Niépce 兄弟の研究を興味深く読みました。大青の葉を刈り取るもっとも良い時期、色素を中間で沈殿させる事なく抽出する方法、などに関する物です。彼らの報告はあなたが言うように大変に立派で、その学識と熱心さの新しい証拠でもあります。各地でなされた、この種の物全体を検討している委員会に、送付したと彼らに伝えて下さい。ここでは、またどれが大青生産の理論を完成し、どれがその実用に成功を収めるかを決定しています。」

署名 Montalivét

やがて、その当時の産業に大きく影響した大変に重要な発明、すなわち

石版術 (lithographie) が J. -N. Niépce 氏のこれからも続く関心を引き付ける事になった。彼はリヨンへの道路に敷くための石を使う研究を始めた。この石はその粒子の細かさと、仕上がりの光沢とで、石版画用の石の代用品になりそうだったのである。

しかし、その見本は彼の作った各種の塗料 (vernis) を塗るの必要な性質を備えていなかった。すなわち質が均一でなく、その結果にムラがあり、酸に対する作用も不均一であった。そこで彼は楽譜の版画印刷に使っていたピューター板 (planche d'étain) を使うことにした。そして1813年の暮れから、彼の研究目標は光によって投射される対象物の映像を、この金属板の上に固定 (fixer) しようと言うアイデアに落ち着いた。

ただ私はここで、大胆な仮説を実証するために続けられた全ての試みについて、語ろうとは全く思っていない！

どんなに知的な苦しみがあった事だろう！

昼は光の中を速やかに走り去り、「始めにありし物」(matière première; 中崎注: 光) は夜の闇の中に消え去り、新しい考えや半分しか完成しなかった仕事は明日に持ち越される。そして夜の中に人は、自分の時間、労苦、健康、そして最も大切な趣味など全てを犠牲にしてまでも希求した成功への希望を憧れ見るのである！

1814年の出来事(中崎注: ナポレオン退位など)で、彼はその興味ある研究を一時中止させられた。しかし外国からの侵攻にも係わらず、すぐに更なる情熱で研究を再開し継続した。この時期が過ぎると、彼の仕事は新しい進歩の年を迎える。

1822年、Niépce氏はアスファルト様の塗料 (vernis bitumineux) を用いて、磨かれたピューター板とかガラス板の上に版画の忠実な複製を始めた。ガラス板上の法王ピウス7世の肖像は当時それを見た人びと全ての驚きの的であった。

1824年になると、彼はその感光膜 (écrans préparés) の上に暗箱写生器の映像を固定するのに完全に成功した。この驚くべき作品はいまだ未完成とはいえ、問題は解決したと同じであった。

この発明を実用化しようとして、彼はこれを光の作用だけで複製を作る目的で、これを版画に応用しようと考えた。それも完成の暁は芸術家が見

でも、最高の正確さに見えるようにである。彼はこれを自分の達成しようとする目標から、そう離れてはいないと考えたものの、Niépce氏は版画技術に全く不案内であった。そこで彼はパリで著名なLemaitre氏の判断を仰ぐことにして、その蝕板(épreuves)を送った。Lemaitre氏はその彫刻刀の技術と人柄で有名であった。その彼がくれた率直にして厳しい激励は、Niépce氏をしてこの新しい利用の追及に向かわせた。Daguerre氏の言うところに従うと、Niépce氏は次ぎのように言ったと報告されている。

「この不毛の多くの仕事の果てに、暗箱写生器の映像を再生させようと言う試みは、ほとんど諦めようと思った(2)。」

しかし父はこんな考えは持っていなかったのである。彼は自分の発明の別の面として、版画の複製を行っていたとはいえ、最初にして最大の目標として暗箱写生器の助けを借りて自然の映像(vues de la nature)を再現することを考えていたのである。ついでだが、Niépce氏は1827年6月4日付けDaguerre氏宛の手紙で、その点に関して次ぎのように、はっきりと言明している(3)。

「私はこれ以外にも色いろ仕事をしておりまして、このごろ(この春から)仕事はこれだけではありません。外が素晴らしい季節になりました今、今日からまた仕事を始め、自然の風景だけ(copie des points de vue d'après nature)を撮るのを開始するつもりです。これが最も面白い結果を与えるのは疑いないのです。」

私の父が非常に不完全な暗箱写生器しか持っていないで、それを使用したために必然的にその結果を損ねたと考えるのは、彼の成功と忍耐力について誤った考えを持っているためである。そのころ父は自分の目的を達成するのに大きな関係を持つ暗箱写生器の改良型を得ようとして、当時パリで第1の光学機器商Vincent Chevalier父と連絡をとり付けた。さて、ここでDaguerre氏が忘れていたらしく、またArago氏の報告(13ページ)<sup>(49)</sup>で歪曲されている事情について引用させて戴こうと思う。

Arago氏は次ぎのように言う。

---

(2) 下院におけるArago氏の報告、9ページ。

(3) これは、私の小論の中に記録される手紙の1部である。

「Niépce 氏と Daguerre 氏との交渉の始めは 1826 年 1 月であった。そのころパリのある光学機器商が軽率にも、彼 (Niépce 氏) に告げて Daguerre 氏が暗箱写生器の映像を固定する目的で実験を重ねていると言った。この事実は皆さんの眼前にある手紙に書かれている。こうして、Daguerre 氏の写真研究の最初の日付についての論争は、確実に 1826 年に 落ち着くことになった。」

父と Daguerre 氏との間の手紙のやり取りが始まった本当の理由を、これから私は正確に報告しようとするのだが、このジオラマの画家 (中崎注: Daguerre) からの反論はない物と確信する。私は全ての手紙を所有しているのだから。事実はこうである。

1826 年 1 月上旬、Niépce 大佐 (le colonel Niépce) は Ré 島の司令官に任命され、それに関連した用事のためにパリに行くことになった。首都パリへ出発するに当たって、彼は私の父のために光学機器商 Vincent と Charles Chevalier の発明に係るメニスカス・プリズムを買うように頼まれた。このプリズムは数年前に発明された物である。Niépce 大佐と Chevalier の会話の中で、話が私の父の発明におよんだ。Chevalier 氏があまり驚くので、大佐は実際に物があること、そして自身でその蝕板 (épreuves) を確かに見たなどと言明せざるを得なくなった。Daguerre 氏が Vincent Chevalier 店を訪ねたのは、こんな交渉の翌日であった。Chevalier 氏は直ぐに、慎重に自分が知った事を告げた。Daguerre 氏は始めは信用しないようであったが、Chevalier 氏の確実な証拠を前にして、この珍しい発明家の名前と住所を知らせてくれるように頼んだ!

Vincent Chevalier 氏は Daguerre 氏の希望をかなえてやり、その数日あとで私の父はこのジオラマ館の経営者の署名の入った手紙を受け取ることになった。この手紙は大変に高びしゃに乱暴に書かれていたが、(dans un style très-cavalier et bizarre) この中に次ぎのような重要な箇所がある。

「私は長い間、不可能 (l'impossible) な事を研究しています。」

この率直な告白から、この時期 (1829 年 1 月末日) Daguerre 氏は研究はしていたのだが、まだ全くなにも発見していなかったらしい (と私は思うのだが) 事が分かるだろう。しかも彼が求めていた物が不可能であった

事は確実で、彼もそれを認めている。

Daguerre 氏の写真研究の最初の日付を、 確実に主張するのはこの言葉としてよいのではなかろうか。

また 1826 年 1 月に Daguerre 氏が暗箱写生器の映像を固定する目的で研究していたと言う事実を、証明する (いわば) 書かれた手紙、それも抜粋でなくて全文を提出できるだろうか。また Niépce 氏の手紙があって、これが Daguerre 氏の研究 — それをこう呼んでいいなら — に言及し、彼の最初の写真研究の幻の日付を証明できるだろうか。

私の父はまず Daguerre 氏への返事が嫌であった事を白状している。彼の手紙は父の言うところによると、「口を割らせる」(*de me tirer les vers du nez*) 目的のように思えた。しかし返事をする事にしたが、自分の秘密をバラさないように注意をして、慎重にこれを書いたのである。

Niépce 氏と Daguerre 氏との手紙のやり取りが始まったのはこの時期からである。

私の名誉に賭けて誓うが、1826 年 1 月の私の父に最初の手紙を書いた時から、1829 年 12 月 14 日両者の間に交わされた共同契約までの間に、Daguerre 氏は Niépce 氏に対して、彼の幻の写真術とその見本を示す事はなかったのである！

もともと、彼は自分が不可能と言っていた仕事を追及していたのだから、それが出来るはずがないではないか。

Daguerre 氏は確かに父の手紙から、父が自分と同じ道を辿っていると信じたかったに違いない。Daguerre 氏からの手紙は、自分の新しい発見を誇示していたが、これは真面目な相手を信用させる手段以外の何物でもなかった。Daguerre 氏が何よりも欲しかったのは、Niépce 氏の手法によって作られた画像を手に入れる事であった。その 1 枚を見るだけで、慎重に書かれた手紙からよりは、ずっと多くの事実を知る事ができるのだから、この 1 枚を入手したいと言う彼の執心は想像に難くない。

私の父は Daguerre 氏の要請に答えて、次ぎのような返事を書いた。

Châlon-sur-Saône, 1827 年 2 月

「昨日、私の 1826 年 1 月 25 日付け手紙に対する返事を受け取りました。冬の天候は都合が悪いので、ここ 4 ヶ月は仕事をしておりません。私は

金属板の腐刻にかなりの改良を加えました。しかし結果はあまり良い刻板を得ておりませんので、お望みのようにはして上げられません。これは私も残念とする所ですが、あなたの方法は私のと全く違い、私の腐刻法よりずっと優れた結果を与えそうです。だからと言っても、あなたの望んでおられる成功が達成される事を願うのに変わりありません。」

Daguerre 氏がずっと前から、Niépce 氏のそれとは全く別の、そしてずっと優れた方法を発見していた！ 私はこれらが全てジオラマの発明者の想像上の夢物語以外の何物でもない事を証明できる。

### 別の手紙

Niépce 氏から Daguerre 氏へ

Châlon-sur-Saône ,1827年6月4日

「私の手紙と同時にヘリオグラフ法によって腐刻したピューター板と、そのプリントの入った箱を受け取られることでしょう。このプリントは淡く、あまり良い出来ではありませんが。初めにお許しを願っておきますが、私がついにこの荷物をお送りいたしますのは、あなたがお申し越しになった希望にお答えするために他なりません。いろんな欠点にも係わらず、この方法の応用が話にもならないとは思いません。それは私が絵や版画に熟練していないのに、この結果が得られているからです。

どうのご意見かお知らせ下さい。

私はこれ以外にも色いろ仕事をしておりまして、この春からの仕事はこれだけではありません。外が素晴らしい季節になりましたいま、今日からまた仕事を始め、自然の風景だけ (copie des points de vue d'après nature) を撮るのを開始するつもりです。

これが最も面白い結果を与えるのは疑いないのですが、これを版画にするのはもっと難しいのは良く了解しております。この仕事は私の手に余りますが、私の希望はあとでアクアチント法に習熟した人の協力が得られたら、多少とも満足できるような成績が得られはしまいかと言うだけです。なぜ私が銅板の代わりにピューター板を使うのかを質問されると思います。もちろん私も銅板は使うのですが、始めの試みにはピューター板の方が都合が良かったのです。と言うのは暗箱写生器の目的には、この金属のキラキラした白色が、写そうとする対象物の撮影 (réfléchié)



にはずっと好都合だからです。あなたはご自身の初期の仕事が続けられるでしょう。まだまだ希望はあります。

おなじ目的に従事していて、ゴールに到達するように仕事を教え合うのは、おたがいのためになるに違いありません。ですから、私はあなたの改良型暗箱写生器による新しい実験が、お望みの結果を与えたとお知らせ願えるのを楽しみにしております。こんな訳で、お許し願えれば、私の方も喜んでこの方面の私自身の結果をお知らせいたしますから、あなたの結果もお知らせ願えればと存じます。」

Daguerre 氏に自分の方法で作った蝕板（塗ってあったニスを予め除いて）を送り、その見返りとして彼の方法を知らせるように頼んだとき、Niépce 氏は Daguerre 氏からも同じ信頼の証を期待する権利がなかったのだろうか？ また研究目標に向かって、少なくとも競争相手（中崎注：Niépce）と同じほど迫っていると言う事は、手紙より事実によって証明できると言う幻想を奇妙にも Daguerre 氏に抱かせてたのは、Daguerre 自身の自尊心の他ならないことを、お人良しにも疑ってはいなかったのだろうか？

Daguerre 氏は何も教えなかったのである。彼には父の要請を拒絶するだけの、立派な理由があった。彼には教える物が何もなかった。4年間なにもしなかったのだから。しかもその間に Niépce 氏と同じ研究をしていたと言うのだ！（4）

次ぎの事実に注目して欲しい。私の父の上記の手紙が1827年6月4日付けであること、また彼の要求に従って自分の方法で腐刻したピューター板を1枚送ったと告げたあとで、同時に Niépce 氏が自分の信頼に答えて彼の側からも好意が返って来ると望んでいた事などである。

そして結果は次ぎのようになった。

1827年8月ロンドン近在 Kiew にいた兄の病が重いと聞いて、Niépce 氏はそこに向かった。パリに滞在中、彼は何度も Daguerre 氏の所を訪ねた。彼らは自分らの発見やら、得られたまた得られそうな成功について語

---

(4) これは父に宛た例の手紙の中で Daguerre 氏自身が言っている。

り合った。

確かに1827年2月の手紙で言っている結果を、Niépce氏に示すことによって得をするのに、これほど良い時期はDaguerre氏にとってなかったのである。それは私の父のと全く違う方法であり、しかもある程度優れていると言うのであった!

確かにDaguerre氏はなにかプリントを作っていたのだろう。それは「私はすでに1824年に暗箱写生器の映像を固定するという唯一の目的のために光の研究を始めた」(5)と言っているからだ。

それは結構!誰がそれを信じるのかね? Niépce氏は何も見せてもらってはいない。たとえ不完全な最小の画像とは言え、見せてもらっていないではないか。Daguerre氏が全ての手紙の中で、自分の仕事について信じさせようと努めていた仕事の影さえもである。

彼は何も見せなかった。なぜか直ぐに分かるでしょう!

ロンドン近郊Kiewに滞在中、Niépce氏は王立学会の著名な会員François Bauer氏と知り合いになった。そして彼はBauer氏に自分のヘリオグラフ法で作った蝕板などを贈った。父の発明がフランスの雑誌にダゲレオタイプという奇怪な名前で発表された時に、Bauer氏が父のために書いてくれた抗議文は、私のこの小冊子の最後の方(75ページ)に載せられている。

1828年1月末にロンドンからの帰路、Niépce氏はまたDaguerre氏を訪問した。しかし、このときも首都パリではDaguerre氏の仕事について何物を得られなかったと言う後悔だけが残った。

こんなのが1829年11月までの出来事である。

このころ、私の父は今までのやり方では、希望している目標までとても到達しないと判断して、協力し合同するように提案した。いままで得た彼らの経験を合わせ、その成果を交換するためである。父がDaguerre氏の誠実について、疑いを抱いたろうか。

Daguerre氏は4年ものあいだ自分も、同じ目的に向かって努力してい

---

(5) Daguerre氏が出版した小冊子の第2章「ヘリオグラフ法についてのノート」の頭にある序文を見よ。

たと語っていたのではないか。Daguerre 氏は 3 年前から、Niépce 氏の仕事について教えてもらっていたにも係わらず、このときもまた自分の研究が本物である事を信用させるのに成功しているのも事実である。

父が Daguerre 氏にこのような提案をした別の動機は、このジオラマの画家が父に向かって、暗箱写生器の大改良に成功したと告げていたからでもある。1829 年 11 月 15 日付けの手紙の中で彼は言う。「この改良は今までの暗箱写生器のどれと比較しても、3 倍の力を発揮します。」

Niépce 氏の発明に関してかくも大きな役割を演じた、この機械の改良を完成したのなら、この人をその発明家と呼んでもよいだろう。Daguerre 氏は急いでこの提案を受諾し、1829 年 12 月 14 日に彼らは協力契約を取り交わした。いろんな反論を避けるために、以下にこれをそのまま引用する。

---

#### 予備契約の基本

一方の署名人、Joseph-Nicéphore Niépce 氏、地主、Saône-et-Loire 県 Chalon-sur-Saône 居住、他方の署名人、Louis-Jacques-Mandé Daguerre 氏、画家、名誉勲章拝受者 (Légion d'Honneur) ジオラマ経営者は、両者の間に締結しようとする会社のために、まず以下の予備契約を結ぶ。

Niépce 氏は画家の手を借りないで、新しい方法により自然の景色を固定する目的で、かなりの研究をし、この発見を裏付ける多くの作品を得ている。この発見は暗箱写生器の中に受けた映像を自動的に再現する事にある。彼からこの発見を知らされた Daguerre 氏は、大いに改良の余地のあるのに興味を持って、これを完成させこの新しい企業から得られる全ての利益に与ろうとして協力を申し出た。このような目的で、両者は次のような協力の予備的にして、基本的な契約を結ぶのに同意した。

第 1 条。Niépce 氏により発明され、Daguerre 氏によって改良された上記の発明を完成させるために Niépce, Daguerre 両氏は Niépce-Daguerre なる商標の会社を設立する。

第 2 条。この会社の期限は本年の 12 月 14 日からの 10 年間とする。これは両者の間の了解なくして、これ以前に解約することは出来ない。両者の 1 人が死亡したときは、10 年の残りについて自然の継承者によって継承さ

れるものとする。さらに両者の1人が死亡したときでも、上記の発明は第1条に書かれた2人の名前以外では公表される事はないものとする。

第3条。この契約の署名された時点で、Niépce氏はDaguerre氏に自分の発見の原理を封印したうえで、教えねばならない。この秘密は全ての経費、損害、利益の補填によって守られる。また関連する各種の応用について、その性質、操作の全てを正確かつ詳細に書類にして渡さねばならない。これは、当該の発明を改良し利用する目的の実験が、完全かつ迅速に行われるためである。

第4条。Daguerre氏は同じ罰則のもとに、自分に明かされた発明の原理、手法の性質、利用の説明を嚴重に保守しなければならない。その上で、自分の能力、才能の全てを使って必要な改良に全力で協力せねばならないものとする。

第5条。Niépce氏は将来得られるはずの利益の、半分に当たる発明の取り分を、会社に譲り渡し、Daguerre氏も上記の利益の半分に当たる暗箱写生器の改良に、自分の才能と努力を貢献しなければならない。

第6条。この契約の署名の時点で、Daguerre氏はNiépce氏に暗箱写生器の改良の原理を公開し、その改良の性質についての正確な書類を手渡さねばならない。この秘密は全ての経費、損害、利益の補填によって守られるものとする。

第7条。Niépce、Daguerre両氏は会社の設立に必要な経費の半分を、現金で支払うものとする。

第8条。両者が上記の発明が腐刻法 (procédé de la gravure) にも応用できるまでに完成したと判断して、ある版画家に試験的なプリントを刷らせたなら得になるかも知れないと考えたときは、Niépce、Daguerre両氏は上記の応用を行わせるのに、Lemaitre氏以外の人を選ばない事に同意するものとする。

第9条。最終契約の時点で、両者はパリにある会社に経営者と経理係を雇う。この経営者は両者によって決められた業務を施行し、経理係はこの会社の利益のために、経営者が指示する入金と支払いを施行するものとする。

第10条。経営者と経理係の業務はこの契約の期間に限るものとする。た

だし再雇用もよしとする。彼らの業務は無報酬であるが、最終契約時によしとすれば、利益の1部を与えるも可とする。

第11条。毎月、経理係は経理を経営者に報告し、会社の現状について説明するものとする。また6ヵ月ごとに出資者は上記の利益を折半するものとする。

第12条。6ヵ月ごとに経理簿と会社の現状は決算され、確認と署名がなされるものとする。

第13条。上記の発明の改変と改良、ならびに暗箱写生器の改変と改良は、両者の共有の資産と利益とする。所期の目的が達成された時点で、この基本契約の上に最終契約を締結するものとする。

第14条。会社の利益は発明者 Niépce 氏と、改良者 Daguerre の折半とする。

第15条。この契約について両者間に係争があるときは、商法 (Code de Commerce) 第15条の定めるところによって、両者によって任命された仲介者によって裁定されるものとする。この決定は法廷に訴えたりする事なく最終のものとする。

第16条。会社の解散にあたっては、経理係が行っても良いし、出資者の間の示談によってもよい。相談のうえで任命された第三者によっても、また両者の中の1人によって雇われた有能な弁護士によるもよしとする。

以上は両者に間に予備的に締結された物で、この履行は上記の住所で行う物とする。

1829年12月14日、Châlon-sur-Saôneにおいて2通作成し署名された。自分の手書きではないが確認する。

J. -N. Niépce

Daguerre

1830年3月13日 Châlon-sur-Saôneにおいて、フォルオ32, 巻C. 9に登録された。5フラン50サンチーム受領, 10パーセントを含む（中崎注：税金）。署名 Ducordeaux

---

上記の契約を読むと次ぎの事がわかる。

Niépce 氏は画家の手を借りないで、自然の景色を固定する手段を発見している。

Daguerre 氏は署名する前に、つぎの事を知っていなかったらうか。

この発見を裏付ける多くの作品を得ている。

Daguerre 氏はその署名で、次の事が事実であるの認めたのではなかったのか。

この発見は暗箱写生器の中に受けた映像を自動的に再現するのにある。

Daguerre 氏は、かって自分が認め自分の意志と正しい動機で署名した事柄に、今になってからあえて異議を申し立てようと言うのか。

父には驚きばかりである！ しかも Daguerre 氏には何の条件も付けられていない。Daguerre 氏の方は自由であり、契約のどの箇条も不利な所がない：まさに反対ではなからうか！

さて、ここでは版画の複製には全く触れる事なく、ただ暗箱写生器の焦点（中崎注：契約文の中には「焦点」と言う言葉はない）に受けられた映像を自動的に再現するとだけある。腐刻法は契約第8条で、版画家の利益になるかも知れない応用の1つとして、述べられているに過ぎない。

また一方で Arago 氏はこの契約を知っていながら、下院での報告の中では、これについて言及しようとはしなかった（9ページ）<sup>(49)</sup>

「Niépce 氏の業績に関連して、今まで述べてきた中で『版画の写真的複製』と限定した言葉に気が付かれたに相違ない。これは多くの不毛の実験の後で Niépce 氏が暗箱写生器の映像を再現しようと言う考えを捨てたか、ほとんど捨てようとしたからである。」

私の父との協力を可能にした原因の1つである、Daguerre 氏によって完成されたはずの暗箱写生器は、一体どう利用されたのか。

私は Arago 氏の報告に中にある不正確さを、全く彼のせいだけにする訳にはいかないと思う。Arago 氏は単に Daguerre 氏から教えてもらった事を、忠実にしやべっているだけだからである。そして彼の誇大癖が歪曲にまで形を換えたのである。

「彼のより高き栄光のために。」(*Ad majorem sibi gloriam*) (中崎注：もとは「神のより高き栄光のために」が本当である)

さて、もっと重要な目的に返ろう。すなわち Daguerre 氏の見せかけの業績についてである。1827年6月の手紙に従うと（中崎注：本当は1827年2月3日 Daguerre 宛の手紙にある）、これは Niépce 氏のと全く違い、腐

刻法よりずっと優れた結果を与えそうな物なのである。また Arago 氏が (Daguerre 氏の言うままに) 彼の写真の日付を確実に 1826 年としているのに、Daguerre 氏はすでに引用した序文の中で自分の光の研究を 1824 年からだとしている。このような、とても確定できそうもない日付の不一致には触れないで、1829 年 12 月 14 日以前の Daguerre 氏の写真研究についての不正を正すのは容易である。いままで述べてきた所によると、Daguerre 氏は私の父と同じ目的を持っていたと偽っている。すなわち、彼によれば 1824 年に光の研究をしていて、その唯一の目的は暗箱写生器の映像を固定するのにあったと言うのである。

ところが、別の手紙 (1827 年 6 月) では、Niépce 氏に向かって自分の使用している手法は父のそれと全く違っていると言っている。しかも腐刻法とは比較にならないほど優れていると言うのである！

これに対して Niépce 氏は返事をしている。

「あなたの望んでおられる成功が達成される事を願います。」

Daguerre 氏が 3 年間も Niépce 氏と同じ仕事をしていたと言うなら、どうしてその仕事を続けなかったのかと人は考えるに違いない。

また人は Daguerre 氏は本当に自分が得たように見せかけていた成功を擱んだのであろうかと疑うに相違ない。

仮に Daguerre が本当に 3 年もの間、私の父と同じ目的で仕事をして、彼の言う成功を収めていたとしよう。では、なぜ Niépce 氏の間にも共同契約などをしたのか。それでは、会社のためになるかも知れないが、2 年間の研究の成果を捨てる事になり、2 人の協力者の仕事は共有財産になってしまうではないか。

これと共に Daguerre 氏は慎みとかデリカシーの感情の全てを無視したのではないか。本当は Daguerre 氏は予備契約第 5 条に言うように、暗箱写生器の改良以上には会社に貢献しなかったのだ。ただ、それだけなのだ。

それでは、1824 年に着手した彼の 6 年間の研究はどうなったのか。また彼の言う私の父のそれより優れたはずの彼の手法はどうなったのか。

Daguerre 氏が栄冠を手にした瞬間、すべては消え失せてしまったのだ。もう誰も疑わない。彼の見せかけの研究なる物が彼が誇示した成果を本当に収めたかどうか、作る事になった会社のためになるような何かを彼が貢

献したかどうかとか、私の父の物だけになるはずの名誉にふさわしい仕事をしたのかどうかなど。

しかも Daguerre 氏は利益には抜け目なかったのである！

大切なのは Niépce 氏の発明のユニークさである。Niépce-Daguerre 商標の最初にあるのは、発明者としての私の父の名前ではないか。

私は世間の正しい良心と正義に訴える！

誠実が死語とは考えていない全ての潔白人びとに聞こう。

「さて Daguerre 氏の事をどうお考えですか？」

しかし、人は聞くだろう。暗箱写生器を完成したのは Daguerre 氏であるのを忘れていないか。そして、会社の利益の分け前の元になっていたのは、その改良ではなかったのか。

そのとおりで、私も忘れてはいない。それこそ私がこれから問題にしようとする事で、Daguerre 氏にとって不幸にも、これから私はその改良と写真研究を調べようと思うのである。全ての光学研究者は 1812 年 6 月 11 日 ロンドン王立学会で Wollaston 博士によって読まれた暗箱写生器に関する報告を知っているに違いない。この報告は同年の王立学会会誌に印刷された。この報告の抜粋は光学技術者 Charles Chevalier 氏によって「暗箱写生器とカメラ・ルシダの使用について」なる題のもとに出版された小冊子に説明されている (Notice sur l'usage des chambres obscures et des chambres claires)。

現在までカメラに使用されている両凸レンズは球面収差と色収差の両方を示す。この第 1 の物は映像の輪郭の鮮明さを損ねボヤケさす。第 2 の物はさらにボヤケさすと同時に、映像の回りに虹のような色を現す。Wollaston 博士がその修正に力を注いだのは、これら 2 つの重大な欠陥であり、一部分ではあるが彼のペリオスコピック・レンズを用いることによりこれを克服した (6)。Daguerre 氏のカメラ・レンズは、この Wollaston 博士の色消しペリオスコピック・レンズに他ならない。確かに色消しを発明したのは Daguerre 氏ではない。この屈折率における収差を修正する方

---

(6) 光学技術者 Charles Chevalier 氏, Palais-Royal 163 番地の総説からの抜粋, 1829 年, パリ。



法は彼の前から知られていて、これが広く使用されなかったのは、これで値段をひどく高くする手間賃のためである。絞り (diaphragme) と呼ばれる、筒の1端に置かれる円形の開口に関して、Wollaston 博士はその直径をレンズの焦点距離に関係づけて計算している。この開口の目的は入ってくる光線の量と方向を決定するにある。Charles Chevalier 氏も、この同じ主題について説明している。

「カメラの中に光線を入れるこの開口の大きさは、映像の鮮明さに大きく影響する。開口が極端に小さいときは、外部の対象物の全ての点から放射される光線はほとんど入れないから、映像は明るくないが、輪郭は鮮明に映し出され、その対象物の完全なシルエットを与える。しかし、反対に開口がある程度大きいと、外部の対象物の全ての点からの光線が多量に入り、映像は強く明るくなるものの、その輪郭は鮮明さを失い、ボンヤリとなってしまふ。最後にこの開口がさらに大きくなると、外部の対象物の映像はカメラのスクリーン上に、もはや現われなくなる。」

Daguerre 氏は単にこの Wollaston 博士の手法と、Vincent および Charles Chevalier 両氏から色消しについて教えてもらった指示に厳密に従っただけである。私は反射によって、外部の像をレンズに送り込む鏡について言及するのを避ける。と言うのは、ここに Daguerre 氏の改良などはないからである。この手の鏡は古くから使用されていて、Wollaston 博士のそれは、Daguerre のカメラと同じ位置に置かれている。

最後に Daguerre 氏のレンズ、絞り、鏡は Charles Chevalier 氏「Wollaston のペリオスコピック・カメラ」なる報文の第1面、第8図の中に描写されている。

なおパリの優秀な光学技術者たちの意見も、このような私の意見に賛成してくれている。これは何人も反論できない、明らかな事実の基づいているからである。

このようにして、私の父と協力するまえに Daguerre 氏が、Niépce 氏の業績に匹敵するような仕事を完成していなかった事に対する事実を、私は提供した物と信じる。また私は彼が暗箱写生器を完成したと言ったのは、幻想に過ぎなかった事を十分に証明したと思う。しかし、この幻想が大変に重要な性格を帯び、大切な契約の基礎に据えられるような基本的な物と

して提出された時には、全く別の性質の物とされたのではなかったのか。これらの法律上の問題に関して、これ以上に議論をして解決しようとは思わない。

他にこれより良い手段がないので、これによって Daguerre 氏の写真研究を確認でき、その日付を 1826 年と確定するために利用された、この Niépce 氏の手紙、またその当時父が抱いていたと同じような目的に向かって、このジオラマ画家も光の作用について研究していた事に言及されているこの手紙、この手紙の中に改良された暗箱写生器を使って Daguerre 氏が得たか得ようとしている成功について書いているのは、あまりにも誠実で人を信じる Niépce 氏が、自分の良心から他人の気持ちを判断して、相手が書いてきた事を信用したからに他ならない（彼の手紙を見よ。21, 22 ページ）（中崎注：23, 24 ページの誤り）。

私は心ならずも、これらの不愉快な事実の判断を読んで下さる方がたに委ねなければならない。彼らにとっては、長く不当にも無視されてきた事実を、明かるみに出すのは容易であろう。

世間の人を納得させ、世論を作りかえ、なかんずく私の言う事の真実性を信じて戴くために、私は全てをありのままに提供した。

契約に署名をしてから、Daguerre 氏は Niépce 氏の発明に関係した手法の本質と、そのいろんな応用を詳細に報告した書類の提供を受けた。この数ページの書類は、2 通作られた。題目は次ぎのとおりである。

「ヘリオグラフ法についてのノート」

Joseph Nicéphore Niépce, Châlon-sur-Saône, 1829

---

父はこの 1 通に署名して、これを Daguerre 氏に手渡し、「ノート」の 1 通に「複写 Niépce 氏より受領, Daguerre」と署名された残りの 1 通の方は Niépce 氏がこれを保存した。この瞬間 Daguerre 氏は、今まで彼がその秘密を知らなかった発明についての詳細を、やすやすと手にしたのである。私はこの Daguerre 氏への受け渡しが行われた場所に居あわせた人間として証言するが、この時 Daguerre 氏はその原理を理解するのに、ほとんど時間のなかった父の発明について、的はずれの意見以外は言えなかったのである。

彼が慎重なら出さない方が良かった、これらのつまらない意見は、しかし彼が出版した小冊子の中の「ヘリオグラフ法ノート」の前に掲載されている「序文」(7)に書かれている日付にまで（中崎注：1829年当時）遡れるものではない。

この2つの方法（中崎注：「ノート」には「追加」があって2部分になっている）を知ったとき、彼の異常な自尊心がこの発表を思い付かせたのである。これはまた彼も認めているように、私に無理に署名をさせたあの忌まわしい強奪の事実を、私の目に軽く見せようとする目的でもあった。

これについては後で触れよう。

だれにも分かるように、この序文は悪意ある妬みから書かれている。この芸術家ともあろう人間が、この序文に中で最初の発明者である父の名誉を傷つけようと企んでいる。

しかも不正な手段で、それが自分の物だと主張しているのだ！

名誉もデリカシーも足元に踏みにじり、自分の価値を高めるために、卑劣な手段を使う人間に、恥あれ！

自分から、その人の思い出が懐かしいと言っていた、その人の亡骸に対する尊敬の念もなく、そのお陰で名声の全てを獲得できたのに、彼の業績を冒瀆しようとする。

Daguerre よ、彼に恥あれ！（8）

私が Niépce 氏の発明について Daguerre 氏が何の寄与もしてないと言ったとき、私はこの発明が単なる目標だけでなく、結果として次ぎのような業績を完成させていたと言うのを忘れていた。すなわち、暗箱写生器の焦点に結ばれ、作用を受けとめる感光膜 (écran) の上に固定された映像をそのまま自動的に再現する仕事である。

それはそれとして、父と協力するまで Daguerre 氏はこれに類する物は何もしていなかった事に、新しく念を押しておきたいのである！

Daguerre 氏は当時なにをしていたか、彼がその役に立たないのを認め

---

(7) 小冊子 37 ページの序文 (Avertissement) を見よ。

(8) もし Daguerre 氏が Niépce 氏の発見について教えられなかったら、今日の名誉に価する完成までにとても到達できなかったに違いない。

ようとしないう、研究とは次ぎのような物であった。

共同契約に署名してから、Daguerre 氏は Chalon-sur-Saône 近在の田舎 Gras に Niépce 氏を訪問した。ここでジオラマの発明者は黄色い粉末の入ったボール箱を示した。

この粉末は焼いた硫酸バリウムに他ならない。彼がこの粉末の上に光線を当てると、これはしばらく蛍光を放ち、次第に弱くなり、最後に全く消えてしまった。これは、単なるポロニア石 (Phosphore de Bologne) と言われる物である。これについて物理学者が多く、しかも実りのない研究を重ねている。

Daguerre 氏はこのような粉末の上に、暗箱写生器の映像を受けとめようと考えていたのだろうか。この事実は、私が今まで彼の仕事が何もない事を証明するために提供してきた、多くの事柄を最もよく裏付ける物であろう。これはまた、1826 年 1 月に彼が父に書いた最初の手紙の謎を解釈する鍵を与えるものでもある。この手紙には次ぎのような曖昧な言葉が書いてあった。「長い間、私は不可能な事を研究しております！」

しかも Daguerre 氏は、ここで彼の研究は私の父のそれに似ていて、さらに優れているとまで強調していた！

こんなのは、今まで例があるだろうか。私は Daguerre 氏に聞きたい、このバリウムの粉末が何か役に立ったのかと。だから彼は 1829 年 12 月 14 日よりまえに、写真研究をしていたなどと言うのは止めよ！

また彼は自分がなにも手を貸さなかった暗箱写生器の改良などをしたように言うのを止めよ！これは光学技術者が昔から知っている Wollaston の装置で、色消しなどではない。

愚かしくも嘘で固めた、見せかけの全てが抹殺されたとき、もし Daguerre 氏が良心を持っていたら、その獲得した栄光の座をどこに求めようとするのか。

Daguerre 氏は Niépce 氏から、その発明の秘密を打ち明けられるとすぐに、活発に仕事を開始した：彼は父の使ったユダヤ・アスファルトをラベンダ油の蒸留残渣におき換えた。この膜は白色で感光性が良いので利点があったが、同じ理由から画像は日陰でも次第に消えてしまった。これを金属板に付けた物では、光に当てられるともっと早く消えてしまった。

だから、こんな改良は何の役にも立たなかったのである。

さて、この2人の協力者の長年にわたる研究の詳細について語るのは止めよう。

1833年6月、死はNiépce氏を襲った。

契約の条項(第2条)に従って、私が彼の後継者になった。

この契約の条項には次のようにある。

「さらに両者の1人が死亡したときでも、上記の発明は第1条に書かれた2人の名前以外では公表される事はないものとする。」

また第13条には次のようにある。

「上記の発明の改変と改良、ならびに暗箱写生器の改変と改良は、両者の共有の資産と利益とする。所期の目的が達成された時点で、この基本契約の上に最終契約を締結するものとする。」

父の死後2年して、私は1835年5月にパリに行った。その目的はDaguerre氏が彼の最近に完成したと称する発明を利用するための方法を相談するためであった。そして5月9日、彼は1829年12月14日父との間に交わされた予備契約に従って、この上に追加契約と押し付けた。

---

### 追 加 契 約

以下に署名する Louis-Jacques-Mandé Daguerre 氏、画家、Légion d'Honneur 保持者、ジオラマ経営者、パリ在 と Mari-Joseph-Isidore Niépce 氏、地主、Châlon-sur-Saône 在、故 Joseph-Nicéphore Niépce 氏の息子にして、唯一の継承者は1829年12月14日の予備契約第2条に従って、以下の事に同意する。

1. この契約に係わる発明がDaguerre氏の協力により、著しい改良を見たので、上記の契約者はその目的が達成され、これ以上の改良は不可能との判断に達した。

2. 多数の実験の結果、Daguerre氏は自身の発見した方法の助けにより、すこぶる迅速に結果を得る可能性を認め、(成功するものとして)これを1829年12月14日の予備契約に定める発明の基礎に入れ代えるべきものと考えた。その結果、上記の予備契約第1条を抹消し、次の物に差し代えるものとする。

第1条。Daguerre と Isidore Niépce 両氏は、Daguerre 氏と故 Nicéphore Niépce 氏によって発見された発明の企業化にあたり Daguerre-Isidore Niépce なる商標のもとに会社を設立するものとする。

なお予備契約の残りの条項はそのままとする。

1835年5月9日、パリにおいて、下記の署名者の間に結ばれ、複製が交わされた。

自筆ではないが、確認する。 自筆ではないが、確認する。

I. Niépce

Daguerre

---

私が Daguerre 氏の要求に同意するのを拒否したことから起こった激しい議論にすえに、また会社の名前を Niépce-Daguerre にするのと、協力者2人のうち1人が死んだときでも、2人の名前でしかこの発明が公表できないと言う予備契約の条項に彼が反対したあとで、私はとうとう Daguerre 氏の名前が商標に前に来ることを承認したのである！この状況のもとで、私がどう行動できたか考えて欲しい！私は彼の強引な要求に全力で反対したのである。しかし彼の誠実のなさ、私の父に思い出に対する侮辱などをなじっても、無駄だった。彼は折れなかった！

Niépce 氏と私の伯父 Claude の長年の苦労は、私が継ぐはずになっている財産の大部分を占めていたのである。私の父が自分のより良い未来のために残しておいた発見の果実を、私が私の子供たちのために熱心に求めて当然であろう。

私はこれまで何度も Daguerre 氏に自分の窮状と希望を打ち明けていた。彼は私の事情を了解してくれたが、この時になって私に新しい貸しをこしらえて、これを自分の利益のため利用しようと企んだのである。彼は私の弱点を見抜いていたと同時に、これだけが私に大きな犠牲を覚悟させるという強力な決め手を、手の中に収めていた。彼はさらに強引に攻め立てて、とうとう私は署名したのである！

震える手で署名しながら、しかし私は私の父の権利を侵害する、このような行為に抗議をしたのであった！

私が契約の変更に同意したこと、私の父の失権に同意し Daguerre 氏に要求の正当性を認めたことなど、疑いなく他人は私を責めるであろう。

なにしろ、これらに署名してしまったのだから！しかし、これが事実なのである！私は今日の日を待つまでもなく、早くから私を責めるこの時の議論の重大さを思い知っていた！

しかし、私は繰り返すが、私の協力者の裏切りと、その時に彼が悪用した状況の力だけが、私が絶望のすえ署名せざるを得なかった原因なのである。数日後、私は Daguerre と別れ自分の家に帰った。

彼は私にその仕事について何も教えはしなかった。私が新しい契約に署名したのにも係わらず、自分の希望しか語らなかった！予備契約第13条は言う「うえの発明の改変と改良は両者の共有の資産と利益とする。」

2年も経たないのに、Daguerre 氏の招待で私は彼を訪ねた。

彼は抱いていた夢を実現したようで、このために1835年予備契約（中崎注：追加契約）第1条を廃止したいと言う意向であった。私がパリに到着すると、Daguerre 氏は私にヨウ素と水銀を用いて作ったと言う作品（épreuves）を見せた。

それは、このあとでそれを見た全ての人びとと同じように、私を驚嘆させたものである！これで Daguerre 氏の飽くなき野心に火がつき、これから止めがなくなる！

ご存じのように、最初の商標は Niépce-Daguerre だったのだが1835年5月9日の契約第2条（中崎注：第1条）でこれが反対になった！

この上は、最初の発明者を思い出させる物すべてを、抹殺すること以外に残っていない。その人は自分の秘密を打ち明け、彼に20年にもおよぶ研究の成果をたったの1日で教えた人である。

これからさき、Daguerre 氏はそのために自分が何物も犠牲にしなかった他人の業績の助けを借りて、Niépce 氏が彼のために開いてくれた新しい道を、恐れることなく進めばよかったのである！

道は平坦で、Daguerre 氏は成功し目的を達成した。

しかし進むに当たって、彼はこの道を案内してくれた人のことを忘れてしまい、あまつさえその人を裏切った。そして捨て去ったのである。

最初の成功に力を得て、さらに彼は予め用意した最終契約に署名させようとした。今度は命令的に私に署名を要求した。その内容はこうであった。

## 最終契約

下に署名する私（中崎注：Isidore Niépce）は、Louis-Jacques-Mandé Daguerre 氏、画家、Légion d'Honneur 保持者がその発明するところの方法を教えてくれた事を認める。この方法が目的とするのは、暗箱写生器の中に作られる映像を、色はないが白黒の完全な諧調のまま固定する所にある。

この新方法は私の父 Joseph-Nicéphore Niépce 氏が発明し、Daguerre 氏により改良された物より、60 倍から 80 倍も速く撮れるという利点がある。この方法を企業化するために 1829 年 12 月 14 日に協力の予備契約が結ばれ、これを次ぎの名前で世に広めることにした。

「J. -N. Niépce 氏により発明され、L. J. M. Daguerre 氏により完成された方法」

彼は私に通知してから、自分が発明者であり、自分が完成した新方法を、上記の予備契約によって設立された会社に、譲渡するのに同意した。それは下記の条件下である。

すなわち新方法には Daguerre の名前だけをつける。しかし公表するに当たっては始めの方法と共にする。これは J. -N. Niépce の名前が当然のことながら表に現れるためである。

以上の同意により、1829 年 12 月 14 日予備契約の残りの条項と、その基本はそのままとする。

予備契約第 9 条（中崎注：第 13 条）に相当する最終契約である Daguerre, Isidore Niépce のこの新契約に従って、上記の出資者はこの各種の方法を公表するに当たって、予約にする方法を選んだ。この予約は新聞によって公示するものとする。登録の開始は 1838 年 3 月 15 日とし、締め切りは同年 8 月 15 日とする<sup>(50)</sup>。予約金は 1000 フランとする。予約の登録は公証人により、かつ予約金の入金も彼の所とする。予約者の数は 400 人を限度とする。予約者の支払いには出来るだけ便宜を計るものとする。手法は少なくとも 100 人の予約者が集まるまでは公表しない。以上が失敗したら、出資者は別の公表の手段を講じるものとする。予約開始以前に購入希望者が 1 人あれば、その価格は 20000 フランとする。



1837年6月13日、パリ、ジオラマ館 Daguerre 邸において複製し、以上に書かれた内容を署名によって証明した。

---

今度は命令的に私に署名を要求したので私は反抗した。私は公式に拒否したのである。すでに私の父の名を彼のと入れ替えさせた、もうこれ以上は馬鹿げた偽装は許さない、このように振る舞って彼は名誉ある感情の全てを踏みにじっている、父の思い出は私にとって貴重な物だから、それに対するこれ以上の攻撃は許さない、父にふさわしい正義を回復するためには全ての法律的手段に訴える、などと私は彼に告げた。

そのとき彼は、そのとおりだと言った。「その思い出が君にとってと同じように、自分にとっても懐かしい方に対して、これとは別に振る舞ったら、自分は君の事を良く思わないだろう」とまで言った。

彼はこの考え（この瞬間おそらく彼の良心の呵責が言わせたのに違いない）を表明することによって、私に抱いていた不満足な感情を隠そうとしたが、上手に行かなかった！私の拒絶が変わらないに苛立って、とうとうこう言った。もし私が要求に応じないなら、自分の手法は自分だけの物にする、そして Niépce 氏の手法だけを発表し、そのあとで自分自身のを発表しよう。こうして父の発見から何の利益も受けられなくしてやる。

このような行動は共同契約の中で、私のために規定してある権利を侵害するのだと、彼に分からせようとしたが無駄だった。彼は答えて言った。

彼の手法は私の父のそれと全く共通する所がない。自分は自分のを保護する権利がある！

彼は自分が操っている糸の及ぼす効果をよく心得ていたのである。私の希望の全てを粉碎する、このような宣言に脅かされて、またまた私は署名をしたのであった！

この署名のあとで Daguerre 氏は、私にこんなにも残酷な犠牲を払わせた、自分の手法の秘密に関しては何も教えてくれなかった！

この回想記を読んで下さる人びとの目に、私が Daguerre 氏の行動について悪口を言っているのだと間違えられないために、この他のいろんな事情について言及するのは差し控えよう。ただ私は自分の名誉に賭けて、私の言っている事は真実であり、誤りのない事を宣言する。

そして Daguerre 氏に反論するのを止めよと命じる。

私がこの回想記を書いたのは、これによって Joseph-Nicéphore Niépce 氏が、暗箱写生器に受けた映像を光の作用によって、白から黒までの諧調をそのまま自動的に再現する方法の唯一の発明者であることを証明したかったからである。

私はまた Daguerre 氏がこの発明に類似の研究をしていなかった事も証明したかったのである。さらに証明したかったのは、彼が 1826 年から 1829 年 12 月までに私の父に書いた手紙は、すべて真っ赤な嘘以外の何物でもなかったこと、言い換えれば Niépce 氏が発見したらしい事実を盗む目的で、巧みにしかも辛抱強く仕掛けた罠だったと言うことである！

また私が攻撃したいのは、Niépce 氏との協力をもちかけたとき、暗箱写生器の改良だなどと言って父を欺いた事実である。彼は強引にもこの発明者だと称しているが、本当は Wollaston 博士がその発明者である。

これは特に重大な事実である！これは信頼の悪用以外の何物でもない！これは登録され、法律の権威を装って契約の中に忍び込ませた詐欺なのである！

Daguerre 氏が自分の名前で発表し、その手法の法律的所有権を主張するのに利用した、これらの契約をよく調査して欲しい。私が全文を公開した、これらの契約はまだ有効である。

私はこれへの署名を拒否できなかった。しかし、私は彼に尋ねた「力と暴力で獲得した商標に何の価値があるのか。」

確かに、この契約に署名させるのに、彼は肉体的暴力は使わなかった。しかし、彼は私の署名を獲得するために、私より上の彼の地位を利用して、全ゆる精神的暴力を使ったのである！

私は何度も Daguerre 氏に向かって、私の父の発明の改良なのだから、予備契約の定めるところにより、彼が開発した手法を会社に引き渡すように要請した。しかし Daguerre 氏は、私が知らないこの手法については、完全に沈黙を守り、とても説明させることができなかった。もし彼がそれに同意したら、学者にその判断を委ねざるを得ないだろう。すると発明は世間に知られ、おそらく暴露される。すると私の損になる！

私は損の中でもより小さな方を取らざるを得なかった。しかし、これは

Daguerre 氏に分を持たせた言い訳にならないだろう。

彼の行為は恥ずべき見下げたペテンの塊まり以外の何物でもない。

Arago 氏ともあろう人が、ある点では仕方がない面もあるが、熱心のあまりこの物真似画家に唆されたのは残念である。

科学学士院の終身総務であり、その言動が大きな影響力をおよぼす、この人にして Daguerre 氏の手法を全く新しい物とし、Niépce 氏のそれと共通する所が何もないと表明しようとは！

原理は全く同じではないか？

光線の強弱の強度に比例して反応する感光剤 (substance sensible) を発見したのは、私の父ではなかっただろうか？ この物質こそは、これを粉末にしてラベンダ油に溶かしたユダヤ・アスファルト (bitume de Judée) に他ならない。次いでこの溶液は銀メッキ板 (planche de plaqué d'argent) に塗られてから、暗箱写生器の中で露光された。

Daguerre 氏も同じように銀板 (plaqué d'argent) を使用したが、彼の感光物質はヨウ素であった。この2人のうちどちらが先に銀板を使用したのだろう。Niépce 氏はヨウ素を使わなかったろうか？これを「ヘリオグラフ法ノート」の中に書かななかっただろうか？確かに彼は Daguerre 氏と同じようには使わなかった。しかし、私の父からそれを聞かなかったなら、彼はその利用を思い付いたであろうか？

Daguerre 氏は答えられるはずである。彼にとって不可能なことはないし、Courtois 氏<sup>(51)</sup>が海藻灰水 (soude de varec) からこの物質の抽出を考える前に、おそらくヨウ素の性質を知っていたのだから。

Daguerre 氏はこの自慢のなかに浸らせておけばよろしい！

しかし他の金属を使って、彼の方法で良い成績が得られないのは明らかである。銀の中に隠れている映像を、目に見えるようにするのに溶剤 (dissolvant) を利用したのは、私の父である。この溶剤は1部のラベンダ油と10部の石油を混ぜた物であった。この溶剤を Daguerre 氏は水銀に代えたのである。最後の洗浄 (lavage) も私の父が使った方法で、これは同じように Daguerre 氏の操作の最後の物でもある。

このように Daguerre 氏の手法の原理は、Niépce 氏の発見のそれと全く同じである事がわかって戴けるだろう。操作は同じであるし、その感光

性が良くなったのは事実だが、物質はユダヤ・アスファルトと溶剤の代わりに水銀を使う以外は変わってはいない。

もし Daguerre 氏が Niépce 氏の仕事を知らされず、完成の域に到達するのに不可欠だったこの情報が彼の想像からの所産としたら、かれの栄光は完璧だったろうに！

そして彼は素晴らしい物を発明したと言ってもよい！

そのあと Daguerre 氏は私の父の秘密を握り、その後の仕事にも参加し、Niépce 氏の方法に従ってその方法を完成し、あとで自分の物にして終ったのである！Daguerre 氏はその栄光だけで充分ではないか。

その野心と自尊心はまだ満足されていないのか。彼はまだだと言って、世論に訴えようとしている。

幸いにも、私は微力ながら自分に課せられた仕事を果たし得たと思う！私は当然に父の物になるべき名誉を回復したのだ！

私は父のためだからと言っても、正義と理性以上の物を求めている訳ではない。同時に私は聡明で公平な全ての人びとの判断に訴えたのが、無駄ではなかったと信じたいのである。

そうなのだ。Joseph-Nicéphore Niépce 氏こそが、暗箱写生器の中に受けられた映像を、光の作用によって、白から黒におよぶ諸調のままに、自動的に再現する発明の真の発明者なのである。

そして Daguerre 氏の方法は、この驚嘆すべき発明の驚嘆すべき改良に他ならない。

勲しある人に栄冠を (Palmar qui meruit ferat)。

---

### 翻 訳

1839年2月27日ロンドン「Literary Gazette」誌編集者に宛てた手紙

ロンドン王立学会会員 F. Bauer 氏

### 芸術

### 新しい手法

「この主題については、大いに興味が持たれていますので（この新手法については、ほとんどの外国雑誌が注意を払っています）以下に載せる手紙は国の内外を問わずに、大いに読者の関心を牽くものと確信いたします。

Bauer 氏がこの発見に投じた光は、大変に珍しい物ですから、私どもはあえて1字も変更しませんでした。思うに、このようにこの発見の優先権は決着がついたのです。また同時に Neipce (中崎注: 原文のまま) 氏と Talbot 氏の2つの方法は全く別物である事も明らかになりました。いずれにいたしましても、この主題に関する情報を、ことごとくお伝えする媒体になれるのは、私どもの欣快とする所であります。」

1839年2月26日 編集者<sup>(52)</sup>

「貴誌『Literary Gazette』の最近号のいくつかで、貴誌がいわゆる芸術における新発見と呼んでおられる事柄に大いに注意を払っておられるのは喜ばしいことです。そこで、この興味ある題目について、これから私がお知らせしようとする事柄は、さらに皆さまの興味を牽くものと存じます。1827年9月 Châlons-sur-Sône 在 Nicéphore-Niépce 氏なるフランス紳士が Kew に参りました。長くイギリスに滞在して Kew に住み、そのころ大変に病の重かった彼の兄を訪ねるためだったのです。

私は直ぐに Niépce 氏と近づきになりました。

彼はどんな映像でも、これを光の自然の作用 (spontaneous action of light) で永久に固定できると言う、重要にして興味ある発見をしたと言いました。その上に彼は大変に興味あるその見本をいろいろ見せてくれました。たとえば、磨いたピューター板上に固定した画像とか、それに化学的処理を施した物から刷った紙プリントなどです。Niépce 氏はこれを『私の長い研究の最初の成果』(中崎注: フランス語)と呼んでいました。

Niépce 氏はまた、この興味あると同時に重大な発見が、ロンドン王立学会に認めてもらえて、これによって自分の優先権が確立できたら良いのにと熱望いたしました。それで私は彼に忠告して、この主題について報告とかメモといった物を書いて、王立学会に提出するように奨めました。彼はそのようにして、1827年12月6日、Kew と日付を入れました。この興味あるメモは、私がここにその翻訳をお目かけます。

Niépce 氏はまた王立学会の著名な人びとに紹介されて、この人びともメモに添えて数枚の興味ある見本 — 彼の研究の成果 — を送りました。彼はまたこれらの人びとの数人とも直接に会ったのですが、彼らは

このメモを数週間検討した上で、メモと見本の全てを返却して来ました。それは Niépce 氏が、そのときは彼の秘密を公開しなかったからなのです。こうして、結局これは王立学会の取り上げる所とならなかったのです。

Niépce 氏は差し迫った家庭の事情で、1828年2月上旬フランスに発つのを余儀なくされました。そして彼らが発って2週間してその兄は Kew で死亡したのです。これらの事情は当然ながら Niépce 氏の科学研究に長い中断を強いることになりました。私どもは、それから暫く親しい手紙のやりとりを続けましたが、1829年1月9日のそれが最後になって終わりました。彼のそれまでの手紙でもそうですが、この手紙の中でも彼は自分の成功した研究 (recherches) について言及し、次ぎの夏には自分の発見を完成させるだろうこと、そしたらその長い研究の最後の結果を直ぐに詳しく告げたいと言う希望を、確信を持って知らせて来ました。

しかし、この日、すなわち 1829年1月9日以後は、Niépce 氏自身はもちろん、彼のヘリオグラフ法 (Héliographie) についても、全く見たり聞いたりする事はなかったのです。

それが 1839年1月12日になって『Literary Gazette』の中のある1章が私の注意を牽いたのでした。それは 1839年1月6日付パリ『Gazette de France』から採った物で『H. Gaucheraud』と署名がありました。この中に私は驚くべき事を読みました。ジオラマで有名な Daguerre 氏が、この興味ある重大な手法を最初に発見したと言ひ張るだけでなく、それに自分の名前を付けているではありませんか。Daguerre 氏が Niépce 氏と親しく交際していたことは私も良く承知しておりましたが、彼が Niépce 氏の研究に積極的に貢献したとは聞いた事ありませんし、了解もしていませんでした。たかだか研究を続けるように激励していた位でしょう。

ただ Daguerre 氏がある実験を熱心にしていて、かなりの成果を収めていたのは知っておりました。

しかし彼の目的は Niépce 氏のそれと全く違っております。それは Daguerre 氏が光の分解 (decomposition of light) と呼んでいる物で、これによって彼はジオラマの演出に驚異的な効果を与えていたのです。これについては、各新聞(『Morning Post』紙を見よ)に素晴らしい説明があります。しかし光の分解は、光線に作用によって映像を固定化する発見

と全く懸け離れています。

この後者に発見についてはフランス各新聞で大きく報道されています (1839年1月6日付パリ『Gazette de France』を見よ)。そこではダゲレオタイプ (Daguerreotype) についての最初の報道は次のようです。『ジオラマの著名な画家 Daguerre 氏によってなされた重要な発見を報道するのは、われわれに喜びとする所である』また『Daguerre 氏は暗箱写生器の背後に生じる映像を固定化する方法を発見した』などなど。さらに『Arago, Biot, Von Humboldt 氏はこの発見の事実を認め賞賛の言葉を惜しまなかった。Arago 氏は数日の内にこれを科学学士院に報告するであろう。』この文章の最後に当たって、この記者は次のような重大な発言をするのです。『Daguerre 氏は彼の方法の最初のアイデアが15年前に Châlons-sur-Saône 在 Niépce 氏によって寛大にも与えられた事を認める。ただし、これは非常に不完全な物だったので、その目的を達成するまでには、長くかつ忍耐深い努力を必要とした。』

しかし、15年前に Niépce 氏がそんな不完全なアイデアを与えたとは、私には思えないのです。1827年に Niépce 氏がイギリスに持って来た見本 (私はその内のある物をまだ持っております) は1839年のフランス新聞の報じている Daguerre 氏の作品に劣らず完全な物でした。しかし Niépce 氏の名前が表に出たのは、これが最初です。これ以後の新聞には、たとえば『1839年1月9日パリ発』記事があり、ここでは多くの褒め言葉の後で、次のように言います『今日7日に Arago 氏は科学学士院で Daguerre 氏の巧妙な発見について口頭で発表した。』続いて記事はこの発見の一般に対する有用性について触れ、また誰にも出来るその簡便性に言及しております。Arago 氏の意見によれば、特許などの手段によって、この発明者にふさわしい利益を確保するのは不可能だと言います。それで最良の方法は、政府がこの秘密を買い取って、これを公表するにあるのだろうと言います。しかし、この報告の中に Niépce 氏の名前は挙げてありません。Von Humboldt 男爵や Arago 氏はかつて無いほど科学的に著名なお方で、私も個人的に存じ上げていますが、正直なところ、私にはこれが理解できません。そして公平な読者の皆さまは Niépce 氏の公式な発表と Daguerre 氏の寛大な発言を重ね合わせた結果、私の次のような意見に同調して下

さるものと信じます。

すなわち Niépce 氏こそ、この興味ある技術の真に発見者である。

1829年に通信が途絶えてしまってから10年間に、Daguerre氏は多くの改良を重ねたでしょう。もしNiépce氏がその秘密をDaguerre氏に譲渡したのなら、その秘密の譲り渡しの結果生じる利益をDaguerreが占めるのは当然でしょう。しかしヘリオグラフ法の発明者であると言う名前だけは、私の尊敬するNicéphore Niépce氏の物です。

Talbot氏の『光写生』(photogenic drawing)については、まだ見たことがありません。しかし新聞記事が教える所によると、彼はこの4、5年間に大変に面白い実験をしたようです。しかし私の考える所によると、彼の手法もNiépce氏の発明と同じ原理の上に立っているようです。

もしTalbot氏が自然の映像を紙の上に永久に固定するのに成功したのなら、この同じ原理のもっとも重大な、と言うことは、もっとも有用な応用に成功したと考えてよろしい。

Niépce氏はイギリスを離れるまえに、私にその新発見の方法の興味ある見本を数枚くれました。その中の1つは自然の映像を始めて永久に固定した実験の見本です。また銅蝕板(copperplate etching)のように刷ることが出来るように、ある化学的方法で処理を施した別の板もあります。

そして、この蝕板から刷った数枚のプリントがあります。

もし、あなたや他の科学者や芸術家でこれに興味を持たれ、私の所持する見本を見たいと思われ、かつ私の宅を訪問する労を惜しまれないなら、喜んでお見せし説明をいたしましょう。

この手紙はあなたの裁量にお任せいたします。適当と思われるように処理して下さい。しかし、もしこの1部または全部を印刷なさるお積もりでしたら、その中に恐らく数多くあると心配いたしております、文法上や綴り字の誤りを訂正して下さいと有り難いのですが。

次ぎの号にこの手紙が印刷されますと、それで手紙が届いたことが分かり、私は大変に有り難く思います。」

Francis Bauer, 王立学会会員

Eglantine Cottage, Kew Green.

1839年2月27日



追伸 私が以上を書きましてから、確かな筋より私の親友 Niépce 氏がすでに、この世にないと言う悲しい知らせを受け取りました。彼は数年前に死亡していたのでした。

### Wollaston ペリオスコピック・レンズ付き暗箱写生器

Wollaston 博士は自分がペリオスコープと名付けたレンズでもって、レンズの形の改良をしたが、その利点は従来からの暗箱写生器に使用されている、両凸レンズに代えてこの型のレンズを利用するにある。これから、この説明に入るが、これは 1812 年 6 月 11 日ロンドン王立学会で読まれ、同年に王立学会会誌に印刷された物の抜粋である。

「眼鏡を掛けて物を見ると、裸眼のときも同じだが、どの方向からも入る光束は小さい。視線からほとんど 90 度も離れた光線も、捕まえることのできる形のレンズが有利である事は実証されている。しかし、かなり広い面積にわたって、十分に明るい映像を与えることの要求される暗箱写生器にあっては、それは簡単ではない。だが、ある改良を加えれば、斜めから入る光線の像は 1 点に集まらないとはいえ、かなり明瞭な映像が得られるはずである。ただ、どこまで改良できるかを、数学的に計算するのは困難である。そこで私は、どのような構造にすれば焦点のあった視野を、もっとも広くできるかについて実験をしたので、これを王立学会に報告したいと思う。

ふつうの暗箱写生器ではレンズと平行におかれたスクリーン平面の上に映像が投射される。そこで、いまレンズの表面が同じ曲率の両凸であり、中心軸の距離  $CF$  でもっともシャープな映像を与えよう (第 1 面, 図 7)。すると、これから外れた方向にある物の映像は多少シャープでなくなる。それは距離が違うからである。このシャープでなくなる理由は 2 つ考えられる。まず第 1 に、中心点を除いてスクリーン面上の全ての点までの距離は中心焦点距離よりも長い。第 2 に斜めに入ってくる光線が結ぶ焦点距離  $cf$  は中心焦点距離  $CF$  より短い。このため一般には、中心にもっともシャープな映像を与える距離より、もう少しスクリーンに近いところに

レンズをおくのが良い。

こうすると、斜めからの光線が入りやすくなるので、中心付近の像の明るさを減らすことなく、視野をかなり広くする事が可能となる。ただし映像がシャープでなくなるのは避けられない。この欠点を除くために私が考えた装置が第1面、図8である。この図はペリオスコピック・カメラの主要部分を正確な縮尺に描いてある。レンズはメニスカス（中崎注：三日月形）で、レンズ面の曲率比は2：1である（9）。レンズは凹面を対象物に、凸面を映像の写るスクリーンの方に向くように装着してある。レンズの直径は4インチ（仏訳：102 mm）、焦点距離は約22インチ（仏訳：557 mm）である。また直径2インチ（51 mm；中崎注：仏訳では誤って051 mmとなっている）の丸穴（中崎注：絞り）が、凹面から外に焦点距離の8分の1の距離においてある。これは入射する光線の方向と量を制限するためである。

この構造がふつうの暗箱写生器より優れているのは、比較したらすぐに分かってもらえるだろう。しかし、その理由は説明を要するだろう。すでに見たように、ふつうのレンズでは斜めからの光束は中心軸焦点距離より短いところに焦点を結ぶ。ところが新しい装置では、斜めからの光束の焦点距離は中心軸焦点距離より、いくらか大きいといえそう大きくはない。

第1の凹面の作用は平行光線を広げるから、第2面による焦点をより遠くに結ばせることになる。その上この第1凹面の広げる効果は、より斜めから入る光線に対してより大きいから、この両面による焦点距離を伸ばす効果は、中心軸を離れたところで大きくなる。ただし第2面に入る光線がそう斜めでなくて、そのため屈折がそう大きくない場合に限る。このために絞り E が設けてあり、斜めから入る光線 Ef は第1面で屈折されてから、より内側に入ることになり、その映像 f は中心像とほとんど同じ平面に結ばれるようになる。

遠視の人の眼鏡に対しては、光線の方向を反対にして考えればよい訳だから、同じ図から遠視レンズの場合のペリオスコピック構成の利点が了解

---

（9）あとからの実験によると適当な曲率比は8：3らしい。Cauchois 氏の実験による。

されるだろう。たとえば本の端 AB を眼を疲れさせずに見るために、この種のレンズは有用である。これは平面上の全ての点から来る光線は、上に説明した議論を反対方向にして考えることにより、平行光線にされるからである。このとき、絞り E はこうして平行になった光線を受ける裸眼に相当する。しかし両者の間に相違もある。

すなわち暗箱写生器では広い視野にわたってシャープな映像を与えるために、レンズの広い面を必要とするために、斜めの方向がシャープであれば中心のところではシャープでなくなる。

ふつうの暗箱写生器では、中心部分だけに明るくてシャープな映像を与えるようにして、斜め方向は無視してしまう。これを矯正して、もっと広い視野にシャープな像を得るために、私は絞りを小さくする必要があると考えた。そして、もっとも適したメニスカスの形を決めるのに視野を 60 度に限った。ただし、そんなに広くなくても良いなら、レンズ面の曲率はもっと小さくしても良いだろう。そうして絞りは視野に応じて変えればよろしい。」

---

「暗箱写生器とカメラ・ルシダの使用に関するノート」抜粋。光学技術者 Charles Chevalier, Palais-Royal, de Valois 街 163, パリ。

---

(中崎注: このあとに Wollaston 第 1 図, 第 2 図が第 7 図, 第 8 図と番号を変えて掲載されている)

## 付 録 2

### Notice sur l'héliographie\*

#### 「ヘリオグラフ法についてのノート」

\*もっと正確な名前が見つかるまでは、私の研究を表すのにこの名前を使いたい。

#### 「ヘリオグラフ法」描写と版画

#### (Héliographie: Dessins & Gravures)

#### 光の作用で自然に得られる結果についての考察

ここに、お許しを願って報告させて戴きますのは、光の作用によって対

象物の像を固定化し、さらにこれを既知の腐刻法によって複製する方法について長らく研究いたしました初めての結果であります。私はこの研究を続けておりましたが、最近に余儀なくイギリスに参ることになりまして、これを続けることができなくなり、もっと満足の行く結果が得られなくなりました。ですから、これらの初めての作品が芸術的見地からより、むしろその結果を生むにいたった方法で判断されることを願うものです。

この方法の有効性こそが完璧な成功を約束するからです。また私は私の仕事に対して寛容であってくださる事を願います。これが、この全く新しい分野に、あえて始めて踏みこんだ第1歩であることを考えて戴ければ同意してくださることと信じます。

この粹入りピューター板 (pewter) の上に作った画像は濃くありません。この欠点は影の部分は金属からの反射から来るのですが、これと明るい箇所との間に十分のコントラストがないのに主として起因します。これは光の作用を受ける部分をもっと白くすることによって容易に改良できるでしょう。またこの液体 (fluide; 中崎注: 光線) をもっと磨いて艶出しをした金属板に上に受けることで改善できるでしょう。それは、こうすることにより白と黒とのコントラストがさらに顕著になるからです。

この黒の所をなにか化学的手段によって、さらに黒くすると反射しないようになり、見やすくなります。ただこれを余りしますと、反対の効果を与えるおそれがあります。

私の版画の作品は、腐刻の線の鮮明さと深さにおいて欠けるところがあります。私がこれらをここに提出いたしましたのは、ただ私の方法のこの重要な応用面と、それが改良される余地のあることをお見せしたかったからに他なりません。

私が乗り越えなければならなかった障害は、この方法自身の性質よりむしろ、私が習熟すべき技術 (中崎注: 腐刻法) に欠けるところがあったからなのです。私の方法は銅板にもピューター板と同じように応用できます。

石には数回試みまして成功していますが、ガラスの方が良好だろうと思います。こういたしましてから、腐刻された部分に少しだけインキを付けて、これを白紙の上に載せますと、濃い印象を得ることができます。

パリ市ジオラマの画家 Daguerre 氏はこの方法を重視するように忠告し

てくれました。それは画像の複製ができるためではなく、これが自然のデリケートな色調の全てを表現するのにもっとも適していると考えerからなので。

私の発明を改良するにあたって重要な物はレンズ (l'optique) でしょう。これの良いのが手に入りませんでした。私は色いろの組み合わせを工夫して暗箱写生器 (chambre noire) によって自然の景色 (point de vue) を撮る試みを1, 2回いたしました。この種の装置を出来るだけ完全にすることによって、始めて自然の忠実な画像を得ることができて、それを適当に固定化できるのです。私はここで私の方法の原理に関連した、この他のもっと興味ある応用について説明ができないのを残念に思います。私がこれに言及するのを差し控えましたのは、これを説明しましても、これが現在の問題についての意見を左右するのに不可欠だとは思えなかったからです。

私はすでに描写と版画技術についての重要な問題を研究しました。ただ、この完璧な回答に対する十分なデータは集めておりませんが、私はこれらがたとえ第2級の物であっても、少なくとも現在の研究段階でも十分に役立つと信じます。困難は原理の実現にあって、一旦これが克服されますと、いまは持っていないもっと優れた技術に習熟さえしたら、明るい未来が開けることでしょう。また私の方法が約束する多くの有利な応用について述べるのは差し控えます。それが大変に新しく、人びとの注意を牽くものである事を述べるだけで十分でしょう<sup>(53)</sup>。

私は私がこの発明の発見者であることを正式に宣言いたします。

私はこれまでに誰にもこれを教えておりません。これを公表したのは今度が始めてです。私はこのことが、そこでは才能がそれに相応しく受け取られ保護されて、芸術の養成で名の知られた、この国でなされた事を喜びとするものです。

Kew, 1827年12月8日

N. Niépce (署名)

Châlon-sur-Saône

Rue de l'Oratoire

Département de Saône-et-Loire

## 文献と注

- (1) 中崎昌雄「現存する世界最古の『写真』—Niépce ヘリオグラフとその『左右問題』」(以下に中崎「世界最古の写真」と略す) 中京大学「教養論叢」第28巻, 第1号(通巻78号) 1 (1987)
- (2) Victor Fouque, *La Vérité sur l'Invention de la Photographie* (以下に Fouque 「Vérité」 と略す) Paris, 1867.  
英訳 Victor Fouque (E. Epstean tr.), *The Truth Concerning the Invention of Photography* (以下に Fouque 「真相」 と略す) Arno Press, New York, 1973.
- (3) T. P. Kravets, *Documents on the History of the Invention of Photography* (以下に Kravets 「手紙」 と略す) (Sources of Modern Photography Series) Arno Press, New York, 1979.
- (4) Niépce の顕彰碑などについては次ぎを見よ。G. Potonniée (E. Epstean tr.), *The History of the Discovery of Photography* (以下に Potonniée 「History」 と略す) Arno Press, New York, 1973, p. 134.
- (5) B. Newhall, *An Historical and Descriptive Accounts of the Various Processes of the Daguerreotype and the Diorama* (以下に Daguerre 「教本」 と略す) Winter House Ltd., New York, 1971, p. 281.
- (6) Agnès の年齢については次ぎを見よ。Potonniée 「History」 注10, p. 75.
- (7) 原 光雄「化学を築いた人々」(自然選書) 中央公論社, 昭和48年11月, p. 58.
- (8) Kravets 「手紙」 p. 148; H. Gernsheim, *The Origin of Photography* (以下に Gernsheim 「Origin」 と略す) Thames & Hudson, London, 1982, p. 33.
- (9) C. C. Gillispie, *The Montgolfier Brothers and Invention of Aviation*, Princeton Univ. Press, 1983.
- (10) A. Senefelder (R. Ackermann ed.), *A Complete Course of Lithography*, Da Capo Press, New York, 1977.
- (11) 吉原英雄「吉原英雄の石版画」河出書房新社, 1981年3月.
- (12) 中崎昌雄「Talbot『写真印刷』 発明と晩年の研究—動力, アッシリア学, 植物学, 数学, 天文学」(以下に中崎「写真印刷」と略す) 中京大学「教養論叢」第31巻, 第4号(通巻93号) 1527 (1990)
- (13) 中崎昌雄「世界最初の『写真家』—Thomas Wedgwoodの生涯と業績」中京大学「教養論叢」第28巻, 第4号(通巻81号) 829 (1988)
- (14) 中崎昌雄「世界最初の『写真』 画集—Talbot『The Pencil of Nature』」中京大学「教養論叢」第28巻, 第3号(通巻80号) 673 (1987)
- (15) G. Potonniée, *Histoire de la Découverte de la Photographie*, Paris, 1925, p. 99.

- (16) 1867年3月10日 Isidore が Fouque に宛てた手紙。Fouque「真相」p. 64.
- (17) この全訳は次ぎにある。中崎「写真印刷」p. 1597.
- (18) 中崎「世界最古の写真」p. 39.
- (19) Fouque「真相」p. 56.
- (20) Potonniée「History」注6, p. 81.
- (21) Fouque「真相」p. 149.
- (22) Fouque「真相」p. 61.
- (23) Helmut & Alison Gernsheim, *L. J. M. Daguerre* (以下に *Gernsheim* 「Daguerre」と略す) Dover Pub. Inc., New York, 1968, p. 49.
- (24) Gernsheim「Daguerre」p. 3.
- (25) たとえば Gernsheim「Daguerre」図版35; Gernsheim「Origin」図版7.
- (26) Fouque「Vérité」p. 149.
- (27) Kravets「手紙」pp. 165, 170, 171, 173, 176, 177.
- (28) 中崎「写真印刷」p. 1597.
- (29) Daguerre「教本」後半の仏文の部, p. 37.
- (30) Kravets「手紙」p. 373.
- (31) Kravets「手紙」p. 428.
- (32) H. J. P. Arnold, *Henry Fox Talbot*, Hutchinson Benham, London, 1977, p. 51.
- (33) *Compt. rend.*, 8, 4 (1839)
- (34) 中崎昌雄「写真発達史における1839年という年— W. H. F. Talbot の場合」(以下に中崎「1839年」と略す) 中京大学「教養論叢」第29巻, 第2号(通巻83号) 275 (1988)
- (35) 中崎昌雄「1839年3月14日 Herschel『写真研究』発表— Talbot との交渉をめぐって」中京大学「教養論叢」第30巻, 第4号(通巻89号) 1179 (1990)
- (36) 中崎昌雄「だれが初めて『パイポ』(チオ硫酸ナトリウム)による写真『定着』を発見したのか」中京大学「教養論叢」第30巻, 第3号(通巻88号) 663 (1989)
- (37) この全訳は次ぎにある。中崎「1839年」p. 312.
- (38) Kravets「手紙」p. 467.
- (39) Kravets「手紙」p. 469.
- (40) Kravets「手紙」p. 475.
- (41) *Compt. rend.*, 9, 250 (1839)
- (42) Daguerre「教本」この本の前半は英訳, 後半が仏語原文になっている。
- (43) Gernsheim「Daguerre」p. 198.
- (44) A. R. Sobieszke, *The Prehistory of Photography: Original Anthology* (Sources of Modern Photography Series) Arno Press, New York, 1979.
- (45) Daguerre の水銀現像法発見の伝説, 経緯については次ぎを見よ。Gernsheim「Daguerre」p. 71.

- (46) Fouque 「Vérité」 p. 149; Gernsheim は Fouque 「Vérité」収録の物は英訳からの重訳だと言っているが誤りである。 Helmut & Alison Gernsheim, *Photographic Journal*, Section A, 5, 118 (1952)
- (47) *Phil. Trans.*, (7) 370 (1812)
- (48) この下線の箇所は初めから空白である。
- (49) これはフランス科学学士院紀要 (Compt. rend.) のページではない。おそらく Arago が 1839 年 8 月 30 日に別に出版した次ぎの小冊子に対する物であろう。 F. Arago, *Rapport sur le daguerréotype*, Bachelier, Paris, 1839. この表紙は Gernsheim 「Origin」 p. 43 にある。
- (50) この「8月15日」が「4月15日」となっている本がある。たとえば Kravets 「手紙」 p. 452 など。 Isidore 「パンフレット」は正しい。 Gernsheim 「Daguerre」 p. 75.
- (51) この箇所は Daguerre の自己顕示欲に対する皮肉である。「何でもできるのだったらヨウ素も発見したと言うのか。」ヨウ素は Bernard Courtois (1777-1838) によって 1811 年に発見された。彼は海岸に打ち上げられた褐藻 (varech) を焼いた灰を水で抽出濃縮した塩 (soude de varech) に硫酸を加えて加熱して見た。そのとき紫色の蒸気が発生し、これが冷えると金属光沢の結晶になった。こうしてヨウ素を発見したのである。ヨウ素の元素性は 1814 年 Davy と Gay-Lussac によって独立に立証された。ヨウ素 (iodine) という名前を与えたのは Davy である。 M. E. Weeks, *Discovery of the Elements*, J. Chem. Ed., Easton, Pa., 1968, p. 708.
- (52) この編集者「前文」は Isidore 「パンフレット」では省略されている。
- (53) 自筆メモの中には、これ以下の削られた物もある。 Helmut & Alison Gernsheim 文献 (46) を見よ。
- (54) Kravets 「手紙」 p.170.